

ドストエフスキイ研究会便り（8）

カラマーゾフの世界

(A).兄弟たち、スメルジャコフを巡って

ー スメルジャコフとマリアとアリョーシャ ー

第3章. イワンの「生涯で最も卑劣な行為」 [第五篇6より]

はじめに

『カラマーゾフの兄弟』のブラック・ホールとも言うべき存在スメルジャコフについて、第1章と第2章の二回で、我々は彼の精神史の全体像をある程度まで見渡せる地点に至った。そこでまず認められたのは、彼の出生と運命の理不尽さと醜悪さが彼の心に刻み込んだ深い闇であり、その悲劇性と悪魔性であった。その極にあるのが、彼がマリアとの逢瀬の際に発した、グレゴリーとイエスに向かったの呪詛の言葉であろう。だが同時にその悲劇性と悪魔性から初めて生まれもする、病的とも言うべき彼の感性と思考の繊細さと鋭敏さも認められ、我々はそこに形而上学的宗教的磁場に触れた悪魔的豊饒さと奥行きという逆説さえ見て取り得ると考えた。このブラック・ホールが闇の奥から我々に示し、また突きつけてくる問題は少なくない。作者ドストエフスキイは、スメルジャコフをこのような闇と光の分裂と混沌の内に据え、その分裂と混沌を、イワンとの出会いを決定的な契機として、究極どこに行き着かせようとしているのか。

今回はまずイワンに焦点を絞りたい。真夜中、イワンが息を殺して階下の父親の動静を窺う姿。この鬼気迫る場面から入り (1)、 「神と不死」を求める「ロシアの小僧っ子」イワンが、モスクワにおいて如何なる思索を展開していたかを概観しよう。スメルジャコフに続きイワンの精神史を明らかにして初めて、我々は帰郷後の二人の出会いと交流の意味を、時間的にも空間的にも奥行きを以って知ることが出来るであろう。(2)。家畜追込町で新たに見出されるもの、それはイワンから受け取った「地質学的変動」の思想を武器として、今度はスメルジャコフが前面に躍り出て、文字通り「前衛的肉弾」として父親殺しの実行に向けイワンを引きずってゆく、恐るべき運命への復讐劇である (3)。そして血の「一線の踏み越え」。二人はそれぞれの良心に臨む裁きの神によって、それぞれの地獄に突き落とされるであろう。ゾシマ長老が予言した「悪業への懲罰」の現前である。それは彼らの積み重ねてきた精神史に応じて展開する過酷な罪と罰のドラマである (4)。その地獄の底での三度にわたる対決。それぞれの神との出会いに至った二人を待ち構えているのは、スメルジャコフの自殺という新たな悲劇だ (5)。最後に二人の兄の悲劇を見守り続けるアリョーシャの神への祈りを検討しよう。そこに見出されるのは、「悪業への懲罰」の末に兄たちがそれぞれに与えられるであろう新たな道、つまり「絞首台」への道と「十字架」への道を見据えるアリョーシャである (6)。

「神と不死」の問題を巡って展開する、ドストエフスキイ文学の総決算とも言うべきイワンとスメルジャコフとの対決。二人の精神の軌跡が交差し、そして離れてゆくドラマは複雑で捉え難い。限られた紙数ではあるが、また前後した叙述や繰り返しも多くなるが、このドラマの骨格を出来るだけ明確に浮き彫りにするよう努めたい。

★

★

★

イワンに関して考察すべき問題は実に多い。様々な角度からのアプローチが可能であるし、また必要であろう。本論は上の「まえがき」に記したように、今までのスメルジャコフについての考察に、新たにイワンについての考察を切り結ばせ、そこから「ロシアの小僧っ子」としての二人の生と思索の在り方を、父親殺しを巡って浮き彫りにしようという目的の下に作業が進められた。そのため複雑な高次方程式のように様々な変数を扱わねばならず、二人の対比と考察だけでも既に多くのスペースを必要としてしまい、イワンに関する論証のみを個別に展開することはなかなか出来なかった。以下に本論の筆者が今まで取り組んできたイワン論を記しておくので、関心を持たれた方は参考にして頂きたい。

1. 『カラマーゾフの兄弟論—砕かれし魂の記録—』前編V、後篇VI B C（単行本、河合文化教育研究所、2016、4）
2. 「ドストエフスキイと現代—アポカリプスの予言とその行方—」（雑誌『キリスト教文学研究』、33号、日本キリスト教文学会、2016、5）
3. 「ドストエフスキイ研究会便り（3）・（5）、殊に（5）『一粒の麥』の死の譬—『カラマーゾフの兄弟』におけるユダの人間論とイワン—」（河合文化教育研究所 HP、2017、3）
4. 「イワン・カラマーゾフのキリスト—「大審問官」、福音書からのアプローチ—」（雑誌『ドストエフスキイ広場 No.26』、ドストエフスキイの会、2017、4）

- 1は、『カラマーゾフの兄弟』全体との取り組みの中でイワンの精神史を扱ったものであり、本論の土台となる論考。殊にモスクワにおけるイワンの思索の足跡については、本論が最も広範かつ詳細に扱っている。
- 2と3は、新約聖書におけるユダやペテロら弟子たちの、師イエスへの裏切りを取り上げ、それとイワンの思想・行動とを対比させ、その現代的意味を考察したもの。
- 4は「大審問官」を中心にイワンの福音書との取り組みに焦点を絞り、彼が言う「常識」という名の悪魔の「否定の精神」について、その在り方と行方を考察したもの。

3.イワンの「生涯で最も卑劣な行為」

【第五篇6より】

第3章目次	(ページ)
1. イワンの「願望」	3～7
2. モスクワのイワン	7～16
3. 帰郷、父親殺し、そして逃走	16～25
4. 「悪業への懲罰」、三度の対決	25～36
5. 新たな悪魔的悲劇、兄弟殺し	36～37
6. アリョーシャの祈り	37～41

1.イワンの「願望」

階下を窺うイワン

真夜中。カラマーゾフ家の二階。イワンが密かに階段の上に立ち、階下の部屋にいる父フォードルの動静をじっと窺っている。「奇妙な好奇心に突き動かされ、息を殺し、胸をどきどきさせながら」の五分間。同じことが二度繰り返される。イワンのこの「行為」について、筆者はこう記す。

「何のためにこんなことをしたのか。何のために耳を澄ませていたのか。勿論、自分にも分かってはいなかった。この《行為》をイワンはその後、一生の間《醜悪な行為》と呼び、また一生の間、心の奥底で、魂の秘密の部分で、自分の《生涯で最も卑劣な行為》と考えていた」(五七)

イワンの生涯にわたる恥辱を暴露した筆者は、この夜イワンの心で起こっていたことを記すのは時期尚早であり、かつ説明も難しいとする。なぜならばそれは「思考の流れ」というよりは、「桁外れの興奮」がもたらした「何か非常に漠然としたもの」であったからだという。それは「観照者」スメルジャコフが密かに積み重ねた、言葉にならぬ「印象」のようなものだったのかもしれない(前回、第2章³)。だが同時に筆者は、この時「冷静さを失った」彼の心を占めていた様々な「願望」について、少なからず説明を試みる。息を殺し階下の父親の動静を窺うイワン。彼の心を占拠していた「願望」とは何であったのか。

イワンの心にあった三人

注意すべきは、この時イワンの心を占めていた人物として、筆者が三人の名前を挙げることである。スメルジャコフとアリョーシャとカチェリーナである。それぞれがイワンにとって重大な意味を持つ存在だ。そして実際イワンはこの日、これら三人と決定的とも言

うべき対決をしていたのである。時系列に沿い、それらを簡単に確認しておこう。

カチェリーナ

まずはカチェリーナ・イワノーヴナである。そもそもイワンの帰郷の目的の一つは、婚約者のドミートリイと共に家畜追込町を訪れるであろうカチェリーナとの恋に、何らかの決着をつけることにあった(五3)。イワンが春に帰郷してから数か月の間に、具体的にいつ二人が再会し、またその後如何なる交流があったのか、筆者は何も記さない。ところがイワンは夏の終わり、八月末から九月初めにかけてのこの日、ホフラコワ夫人宅で、カチェリーナに「決別」の宣言をしていたのである(四5)。だが彼は自分の言葉を信じてはいなかった。再会後なお強く燃え上がったカチェリーナへの思い、これを消し去ることなど決して出来はしないことを、彼自身十分に承知していたのだ。ところが筆者によれば、この夜息を殺して階下の父の動静を窺うイワン心の中には、カチェリーナの影は微塵もなかったのである。後でこの事実を思い起し、イワンは「愕然とした」と記される(五6)。カチェリーナを追い払って、この時イワンの心を占拠していたものとは何であったのか。

アリョーシャ、そして「大審問官」

次に弟のアリョーシャである。カチェリーナとの「決別」の後イワンは、料亭の「みやこ」で「神と不死」の問題を巡り、弟のアリョーシャと帰郷後初めて正面からの対決をしたのであった(五3-5)。ここでイワンがアリョーシャに語り聞かせた「大審問官」の叙事詩あるいは劇詩とは[以下、劇詩とする]、「地質学的変動」の人神思想に先立つ、彼の人間論とキリスト論の総決算とも言うべきものである。そしてこの劇詩の最後にイワンが描くのは、ユダたる大審問官の裏切りに対して、キリストが接吻を以って応える場面だ。この接吻とそれに続く場面とはモスクワにおけるイワンの思索の到達点を知る上でも、またアリョーシャが生きる「実行的な愛」を理解する上でも極めて重要な場面である。「大審問官」の劇詩自体は次の[2]で扱う予定であり、記述は少々先取りとなるのだが、真夜中に階下の父親の動静を窺うイワンの心を理解するためにも、この一連の場面だけはここで一度確認しておこう。

モスクワにおけるイワンの「神と不死」探求の旅、殊に福音書のイエスとの取り組みの行き着くところ、それはイエスを二重に裏切るユダたちの発見であった。そのユダとは、まずは人間存在そのものである。人間と世界とその歴史を凝視するイワンの目に、人間とは弱く愚かな存在でしかなく、絶対の自由の内に神に向かうことを説く「キリストの愛」を受け容れる力など持ちあわせてはいないのだ。地上に満ちる幼な子たちの涙を凝視するイワンが、その裏返しに得た否定的悲観的人間観である。更にもう一つのユダたる存在、それはこの弱く愚かな人間たちに、「天上のパン」に代り「地上のパン」を提供することで、彼らを自らの奴隷とするに至った「大審問官」である。イワンによれば、世界とその歴史を支配してきたのはこの大審問官たちなのだ。かくして彼らにせよ弱く愚かな人間たちに

せよ、この地上とは神と「キリストの愛」を裏切るユダたちが満ちる世界に他ならない。

だがイワンが自らの劇詩の終局に提示するのは、謎のような捉え難い場面である。つまりイワンはこのユダたる大審問官に対して、イエス・キリストが沈黙の内に接吻を与える場面を描くのだ。ここにいるのは「キリストの愛」を深く理解し、またそれに感動するイワンに他ならない。ところが驚くべきことに、この決定的とも言える感動的な場面の直後に、イワンは大審問官がイエスを追い払う場面で以って劇詩を閉じるのである。「この接吻は老人の胸の内に焼きつけられていた。だが彼は己の^{イデエ}考えに踏み留まった」(五五)。

「キリストの愛」を最終的に斥けた「ロシアの小僧っ子」イワン。我々が前回見たスメルジャコフとイワンとの出会いと交流、その核となった「地質学的変動」の人神思想とは、この劇詩の終局に提示された大審問官の「己の^{イデエ}考え」の延長線上に生まれた思想であることがここに確認される。モスクワにおいてイワンは、「人類七千年の習慣」が作り上げた「良心」を棄て去り、自らの内なる「神という観念」を根絶させ、更にはイエスと「キリストの愛」をも斥けた末に、自らを「一切が許されている」神とし、故郷に乗り込んだのである(前回、第2章^[5])。

だが「大審問官」の劇詩はこれで終わらなかった。続いて兄弟二人の間に生じたのは劇詩を受けた現実、アリョーシャがとった一つの「行動」であった。神と「キリストの愛」を斥けたイワン、敢えて言えば神を殺しイエスを磔殺した兄のユダ・イワンに対して、アリョーシャは自らの接吻を以って応えたのである。

十字架に至るまで自らの生を「実行的な愛」に捧げたイエス、その「キリストの愛」をイワンが完膚なきまでに斥けた直後、今度は弟のアリョーシャが自らの接吻によって、「キリストの愛」を兄に伝え返したのだ。イワンは心の底から揺り動かされる。「肯定と否定」の間を揺れ動きつつ、モスクワで一人孤独の内に探求し続けた「神と不死」の問題、その究極の到達点たるべき「ホザナ！」の一瞬を、思いもかけずイワンは弟アリョーシャによって与えられたのである。聖書世界のユダの接吻に発した波紋が、遙か遠く時空を超えて『カラマーゾフの兄弟』の世界に及んで響き合う、ドストエフスキイ文学の極北に位置する場面の一つと言えよう。筆者はイワンが、内から込み上げる感動をこう表現したと記す。

「いいか、アリョーシャ。もし俺が本当に粘っこい若葉たちに向き合うことになるのなら、それはお前を思い出すことによって初めてそれらを愛するということなのだ。お前がこの世界のどこかにいてくれるというだけで、俺にはまだ生きてゆくだけの力をなくさずに済むだろう。お前にはこんな話はうんざりか？ 何なら、これを愛の告白と受け取ってくれてもいい。さあ、それではお前は右、俺は左だ。これで十分だ。そうだろう」(五五)

イワンの奥深くに脈打つ春の「粘っこい若芽たち」への愛。彼は自分の内なる生命愛が、更に奥深くの神と「キリストの愛」に触れ、支えられることで初めて浄化され聖化され、

この世界で「生きてゆくだけの力」となるのであることを、アリョーシャの接吻を通して一瞬の内に自覚させられたのだ。だが、(この「だが」が続くことに注意しよう!)、その正に同じ夜、息を殺して階下の父の動静を窺うイワンの胸の内からは、カチェリーナの存在に次いで、既にこのアリョーシャの接吻の感動さえも消え去っていたのである。消え去っていたどころか、筆者によればアリョーシャとの会話を思い起こすと、イワンには既にこの弟が、更には自分さえもが「憎らしく」思われたという。「だが」という否定の精神を、一切に対して発動し続けるイワン。彼の心はどこに向かっていたのか。

スメルジャコフ

内に燃え盛るカチェリーナへの愛。一瞬とは言えアリョーシャによって触れさせられた神と「キリストの愛」のリアリティと、春の「粘っこい若葉たち」への愛の可能性。だがその帰り道、イワンは既に深い「憂愁」に捕われていた。「耐え難い」とも、「得体の知れぬ」とも、「胸のむかつくような」^{タスカ}とも記される、この憂愁の虜となったイワンを待ち受けていたのは、夕涼み中のスメルジャコフであった。カチェリーナとアリョーシャに続く、第三の人物の登場である。

二人の対話の詳細は省こう。この下男スメルジャコフの「学者じみた」冷静かつ巧妙な罠に絡め捕られたイワンは、彼が周到に準備を重ねていたフォードル殺しの計画の「実行」に、結局いつの間にか同意をさせられてしまっていた(五六)。その直後のことだ。スメルジャコフの驚いたことに、イワンは出し抜けるに声を上げて笑い出し、そのまま笑い続けてその場を去って行ったと記される。筆者はその笑いが決して「愉快さ」からのものではなく、「どうしても説明がつかぬ類いのもの」であったと付け加える。その先にあるのが本章の冒頭、真夜中、階段の上から息を殺して父親の動静を窺うイワンの姿である。

筆者はこのイワンについて、真夜中にもかかわらず、彼は突如階下に降りてゆき、別棟にいるスメルジャコフを「叩きのめしてやりたい」気持ちに捕われたと記す。だがイワンはその理由を聞かれても、あの無礼この上ない下男への「嫌悪感」からだとしか答えられなかっただろうとも記される。スメルジャコフに対する説明のつかない凶暴な怒りと嫌悪感。その一方で筆者はこの夜のイワンが、「正体不明の屈辱的な臆病風に何度か肝を冷やされ、このため突然、肉体的な力さえ失ったかのような感がした」とも記すのである。

真夜中、息を殺して階下の父親の動静を窺うイワン。我々の前に立つのは、最早持ち前の鋭利な知性のコントロールを失って取り乱し、カチェリーナをもアリョーシャをも意識の外に追いやり、スメルジャコフに導かれ、心の奥深くから現われ出ようとする「願望」に自らを譲り渡そうとしつつあるイワン、その高揚感と恐怖感の相反する両極的な感情に翻弄されるイワンの姿である。

ドストエフスキイのこの圧倒的な筆を導入部として、我々は以下にイワンとスメルジャコフが共に踏み込んでゆく父親殺しのドラマを追うことにしよう。その際まず我々は、父

親殺しに至るまでの二人の異母兄弟の精神史を概観しておこう。スメルジャコフの精神の歴史については、前回まででほぼ全体を見渡せるところにまで来ている。他方、真夜中に息を殺して階下の父の様子を窺うイワン、この懼るべき「醜悪な」あるいは「卑劣な行為」に彼を追い込んだものとは一体何であったのか。このことを十全に理解するためには、そもそも家畜追込町でのスメルジャコフとの出会いに至る前、モスクワにおいてイワンが如何なる思索を重ねていたのか、その過誤も含めて彼の精神史を概観しておく必要があるだろう。その上で二人の精神史が切り結ぶ交点にある父親殺しに光を当てよう。それは二人の精神史の痛ましい到達点であると共に、二人が新たに投げ込まれる懼るべき道の出発点でもあるだろう。

2. モスクワのイワン

モスクワのイワン

モスクワでイワンが辿った思索の足跡、ドストエフスキイが描くその全行程を詳細に追うことは、ここでは不可能である。以下にイワンの思索の核となる「神と不死」の探求と、殊に福音書におけるイエスと「キリストの愛」との出会いを太い縦糸とし、この縦糸に沿って彼の思索の足跡を四つの段階に分けて辿ることにしよう。それぞれの段階で可能な場合には、スメルジャコフの精神史との対比も試みたい。

1. 「ロシアの小僧っ子」

アリョーシャと初めて正面から向き合ったイワンは、次のように言う。

「俺もお前と同じロシアの小僧っ子だ。[中略] そういう連中が、飲み屋でわずかな時間を捉えて何を論じると思う？ 他でもない、神はあるかとか、不死は存在するかとかいう世界的な問題なのだ」(五三)

ここでドストエフスキイはイワンに、『カラマーゾフの兄弟』を貫く中心テーマをこの上なく明瞭に表現させたと言えるであろう。イワンとは何よりもまず、「神と不死」を求める「ロシアの小僧っ子」なのだ。「人間の内にある神という観念」、この不思議の前に立ち、またこの不思議を誤魔化さず、神を真摯かつ熱烈に追い求め続ける青年、それがモスクワ時代のイワンであることを忘れてはならない。

だがイワンはその神探求において、ユークリッド的知性の内に閉じ込められた人間が神を捉えることは不可能だとの結論に至る。そして彼は神を天上世界に追いやるのである(五四)。カント以来の哲学史に即しても、これは極めて正統的な認識論的結論と言うべきであろう。神の熱烈な探究者にして、人間知性による神の認識不可能性を悟った哲学者。だが

イワンとは、それでも神なきはずの地上世界を「神の世界」として、「隠れたる神」を追い求めずにはいない青年である。つまり「自己矛盾的存在」（西田幾多郎）たる「ロシアの小僧っ子」、「肯定と否定」の間で揺れ動く矛盾・分裂体がモスクワのイワンなのである。このイワンが地上世界に何を見いだしたかについては、次の2で確認しよう。

ここからスメルジャコフにも目を向けるとどうなるだろうか。第1章と第2章の二回、我々がスメルジャコフの内に認めたのは、イワンと同じく深く聖書的磁場の中に生き、形而上学的とも宗教的とも言うべき思索を展開する青年の姿であった。だがこの青年はイワンのように「肯定と否定」の間で揺れ動く矛盾・分裂体と言うよりは、既に否定の方向に大きく傾いた「ロシアの小僧っ子」と言うべきであろう。創世記が記す光の始原の矛盾を鋭く指摘し、「芥子種一粒」でも神に対する真の信仰心を持ち得る人間が存在するか否かを問い、その問いへの答えを否定的な方向に捉えるスメルジャコフ。育ての親グレゴリーイの愛と信仰心を揶揄して歪め、更にはイエスに対して痛烈な呪詛の言葉を投げつけるスメルジャコフ。彼の内に認められるのは、不幸な運命によって刻印された悲劇的悪魔的心性である。理不尽で醜悪な己の運命に対する激しい怒り、そこから万人万物一切に対して抱く復讐心。スメルジャコフとは矛盾・分裂体であるどころか、むしろ精神の悲劇的悪魔的一貫性を特徴とする青年と言うべきであろう。

イワンとスメルジャコフ。これら異母兄弟はモスクワと家畜追込町において、将来の出会いに向けて、それぞれの「ロシアの小僧っ子」の精神を孤独の内に育てていたのだ。

2. 地上世界の不条理、「罪なくして涙する幼な子たち」

人間知性による神認識の不可能性ゆえに、天上に神を追いやったイワン。だが先に見たようにこの青年は、神なきはずの地上世界をなお「神の世界」として、「隠れたる神」を追い求めずにはいない矛盾・分裂体としての「ロシアの小僧っ子」である。そしてこのイワンが地上世界に見出したのは、罪なき幼な子たちの涙がただ流されるだけの悲惨な現実であった。罪なき幼な子たちの受難は何のためにあり、また如何にして贖われるのか。苦しむ者たちの「目より凡ての涙^めを拭^{すべ}ひ給^{なみだ}ふ^{ぬぐ}たま」神を（ヨハネ黙示録七 17）、既に天上に追いやってしまったイワンにとり、地上の不条理の意味を説明し、またその贖いを引き受ける責任主体はどこにも見出されない。幼な子の母親でさえ、と彼は続ける、その幼な子から流されてしまった涙、幼な子が味あわされてしまった苦悩の絶対性ゆえに、その子を癒す力も贖う力も持ち得ないのだ。「俺は、神の世界を認めない！」（五4）。イワンが行き着くのは認識論的神否定に続く、倫理的な神否定と言えよう。その果てに彼の前に広がるのは、ただ「報復できぬ苦しみ」と「癒されぬ憤怒」が駆け巡るだけの荒涼索莫たる世界でしかない。

罪なくして涙する幼な子たちの涙、世界を支配する不条理を弾劾するイワンに、弟のアリョーシャも心を揺り動かされる。だがアリョーシャは、この兄イワンの認識と弾劾を「叛逆」だとして非難する。先に見たようにアリョーシャにとっては、動かし難い絶対的不条理としか思われぬこの現実世界を前にして、人間は神に向かい、イエスに向かい、そし

て「キリストの愛」に目覚めるのだ。つまりアリョーシャはイワンが、その認識論的神否定を倫理的神否定にまで繋げてしまったこと、そしてイエスと「キリストの愛」に目を向けずにいることを非としたのだ。彼にとり兄イワンの現実認識と神認識とは、たとえそれが如何に人の心を抉る痛切鋭利な認識であろうとも、画竜点睛を欠いた不徹底な認識でしかなかったのである。次の3と4でも、また最後の[6]でも見るように、この兄弟の対立はこの作品を貫く太い縦糸の一つとなつてゆくであろう。

ここからスメルジャコフとイワンとの関係に目を向けておこう。繰り返し指摘することだが(第1回[3]、第2回[6]、今回[5])、罪なくして涙する幼な子たちを指し示しつつ、地上世界とそれを司る(天上に追放されたはずの)神を弾劾するのはイワンである。だがイワンの目の前にいる異母兄弟、父親の下男として生きるスメルジャコフこそ、正にその「罪なくして涙する幼な子」の一人に他ならない。ところが「灯台下暗し」、イワンはこの下男に「地質学的変動」の人神思想を熱く説き聴かせるものの、下男が負わされた運命のことも、理不尽で醜悪な運命によって刻まれた彼の心の闇のことも一切理解しようとはしないのだ。ここにもまた我々は、鋭利な知の人イワンの認識上倫理上の致命的な矛盾・欠陥があること、また若旦那イワンが持つ倨傲の精神、敢えて言えば原罪性と言うべきものがあることを確認しておかねばならない。イワンが抱えるこれらの矛盾・分裂は、イワンとアリョーシャとの間に存在する決定的な問題であるばかりか、イワンとスメルジャコフとの出会いと交流の底にも潜み、やがて二人の対決と永遠の別れを生む大きな原因となるであろう。

3. 十字架、「キリストの愛」の凝視

十字架のイエスへの感動

神を天上世界に追いやったイワンの前に広がる世界、繰り返しとなるが、それは罪なき幼な子たちの受難が繰り返されるだけの世界、ただ彼の「報復できぬ苦しみ」と「癒されぬ憤怒」のみが駆け巡る荒涼索莫たる不条理の世界でしかなかった。つい今も我々は、この荒涼索莫たる不条理の世界を前にして、神に向かい、イエスに向かい、そして「キリストの愛」に目を向けるのがアリョーシャであることを確認した。だが実はイワンもまたイエスと出会い、「キリストの愛」と出会い、心を揺り動かされていたのである。

モスクワにおいてイワンが福音書のイエスと正面から向き合っていたこと、我々がこの事実を知るのは、これからもしばしば取り上げるのだが、父親殺しの罪の決定的な自覚に近づくにつれて人格崩壊が進むイワンに現れた、彼自身の分身たるチョールト悪魔によってである。作品の終盤この悪魔が、十字架上のイエスと向き合うイワンの姿を回想するのだ(十一9)。ルカ福音書が伝えるゴルゴタ丘上でのイエス磔殺の場面である(二十三32-43)。悪魔によると、一緒に十字架につけられた二人の罪人のうち右側の悔い改めた罪人を抱き、天使たちがうたう讚美の歌の中を昇天してゆくイエスの姿に、イワンは感動のあまり「ホザナ！」を叫びそうになったとされるのである。

ルカを始め諸福音書が伝えるイエス・キリストとは、イワンの言う罪なき幼な子たちの

涙に満ちた世界において、神を愛として捉え、あるいは神の愛に捕らえられ、その愛を十字架上で磔殺されるまで貫いた存在であったと言えるであろう。「報復できぬ苦しみ」と「癒されぬ憤怒」のみが駆け巡る荒涼索莫たる不条理の世界と向き合ったイワンは、このイエスの十字架と、十字架によって示された「キリストの愛」を前にして、それをこの地上世界に打ち立てられた唯一絶対の真理として認識するに至り、「ホザナ！」さえ叫びかかったのだ。このイワンとはアリョーシャと同じく、「キリストの愛」に心を震わせる「ロシアの小僧っ子」イワンに他ならない。

「ホザナ！」と悪魔の否定の精神

だが悪魔が伝えるのは、イワンの心のもう一つの現実である。十字架上のイエスへの感動のあまり「ホザナ！」を叫びかかったものの、実はイワンは最後の最後になってその叫びを押し留めてしまうのだ。「ロシアの小僧っ子」イワンの心の内には、「キリストの愛」に素直に心を開かせない何ものかが存在していたのである。彼の悪魔はそれを「常識」と呼ぶ。「だが常識が、僕の最も不幸な特性がギリギリのところまで僕を引き留めて、僕は折角の瞬間を逃してしまったのだ！」(十一9)。悪魔によれば、この「常識」という名の否定の精神こそが世界成立に「必要不可欠なマイナス」であり、これをイワンの内で発動させることこそ、自分がイワンの許に遣わされた最大の使命であるとするのである。「僕は君を導いて信と不信との間を絶えず行ったり来たりさせる。正にここに僕の目的もあるのだよ」(十一9)。このイワンとは、イエスと「キリストの愛」を裏切るユダ・イワンに他ならない。兄イワンの神に対する姿勢について、アリョーシャが下した「叛逆」という判断は、このイエスと「キリストの愛」に対するイワンの姿勢についても妥当すると言えよう。ここにもまた「肯定と否定」の矛盾・分裂を宿命づけられた「ロシアの小僧っ子」イワンがいる。

イワンとスメルジャコフのイエス像の対比については、次の4で取り上げよう。

4. 「大審問官」の劇詩のイエス、「肯定と否定」

イワンのイエス・キリストへの「肯定と否定」、相反する両極的姿勢が何よりも雄弁に表現されるのは、彼が弟のアリョーシャに語り聞かせる「大審問官」の劇詩である(五5)。ここでは今見た十字架上のイエスに感動し、しかも最終的にはそのイエスを否定し斥けるイワンの矛盾・分裂した精神が、その陰影と規模を最大限に拡大して現われ出るであろう。

まず冒頭の場面に注目しよう。ここには福音書との取り組みからイワンが得るに至ったイエス・キリストについての認識と、そこから与えられた感動の全てがこの上なく熱く表出されている。イワン自身この冒頭の場面こそ「自分の劇詩の最も優れた場面になるだろう」と語り、アリョーシャもまた熱く叫ぶ。「兄さんの劇詩はキリストに対する讚美であって、弾劾ではない」(五5)。

劇詩の冒頭、中世スペインのセヴィリアの街に再臨のキリストが登場するや、民衆は直ちにそれが「キリスト」であることに気づく。ここでイワンが重ねて表現するのは、地上

への再度の登場を決意するに至ったキリストの、民衆に対する「測り知れない同情心」と「限りない慈愛の心」だ。このキリストの胸には「愛の太陽」が燃え、その眼には「[神の]光明と叡智と力」が宿されているとされる。一方「それに応える愛で心を打ち震わせる」民衆の内にも、熱い「信仰の炎」が燃えている。イワンが如何に熱く福音書のイエスに目を向け、如何に深くイエスと彼を迎える民衆とを共に理解したかがストレートに伝わってくる場面である。ドストエフスキイ文学の中でも、イエス・キリストを直接表現し、その民衆との出会いと両者の間に通い合う信と愛とを、これほどまでに的確に表現した場面は、アリューシャが見る「ガリラヤのカナ」の婚宴の夢（七四）以外にまずないであろう。

ちなみに『カラマーゾフの兄弟』においてイエス・キリストが直接登場する場面は三つある。アリューシャの「ガリラヤのカナ」の夢、イワンの「大審問官」の劇詩において、セヴィリアの街への登場、そして大審問官による審問、これら三回である。恐らく世界文学の中でも、これら三つのイエス・キリスト像ほど気韻生動の雰囲気の内イエスが活写された例は数少ないであろう。しかもこれら三つの内の二つまでもが、イワンが表現するイエス像なのだ。聖書に通暁するイワンを前提としない限り、ドストエフスキイは彼の手二度までイエス像を委ねることはしなかったであろう。

イエス・キリストの追放

だがイワンの劇詩が最終的に描くのは、大審問官がイエス・キリストを追い払う場面である。先に見たように ①、ユダの裏切りの接吻に対して返されるキリストの愛の接吻、この「キリストの愛」を大審問官が斥けて劇詩は幕を閉じるのだ。キリスト讃美に始まり、キリスト否定に終わる「大審問官」の劇詩。冒頭に描かれた熱狂的にキリストを迎える民衆と、大審問官による「キリストの愛」の排斥。これらイエス・キリストに対する「肯定と否定」両極の精神をイワンに鮮やかに描かせた上で、最終的に「常識」という名の否定の精神を彼に発動させたものとは果たして何であったのか。

先に結論を記せば、我々はそれが人間に対するイワンの深い絶望と軽蔑、そしてイワン自身の内に存在する倨傲の精神であったと考えたい。ここから改めて「大審問官」の劇詩に目を向けよう。

「荒野の問答」、「天上のパン」と「地上のパン」

さてイエスを前にした大審問官は、マタイ福音書に記されたイエスと悪魔との三つの問答、いわゆる「荒野の問答」（四 1-11）に的を絞り、その論述を展開する。これら三つの「荒野の問答」の中で、大審問官が最も重点的に論じるのは第一の問答である。これを通してイワンの思想のエッセンスが、つまりはその人間論とイエス・キリスト論が浮かび上がり、更には彼の「キリストの愛」排斥の理由も明らかとなるであろう。

大審問官によればイエスとは、人間の生の究極の糧は神から与えられる「天上のパン」であるとするイエスであり、また人間は神からその「天上のパン」に向かうべき絶対の自

由を付与されているとするイエスである。これは劇詩の冒頭でセヴィリアの街に登場した再臨のキリスト像とも通じ、神と人間への絶対の信と愛を示すイエス・キリストに他ならない。更に大審問官によれば、十字架につけられたイエスに向かい、通りがかりの者たちが「いま十字架より下りよかし、然らば我ら彼を信ぜん」、このような冒涇と嘲笑の声を浴びせても（マタイ二十七42 / [39-44、マルコ十五29-32、ルカ二十三35-38]）、イエスは決して十字架から下りることはしなかった。イエスが人間に望んだのは神に向かう自由な信に他ならず、決して奇跡への信などではなかったからだ。人間に対するイエスの絶対の信と愛を見据えるイワンの視線は一貫したものである。

人間の愚かさ弱さ

続いて展開するのは、大審問官が自らの登場の必然性を語る長大な論証である。ここにいるのは「聖なるもの」を裏切る「人間の中の悪魔性」、人間の愚かさ弱さを凝視し暴露するイワンだ。この人間論こそ「大審問官」の劇詩に続く「地質学的変動」の思想、殊にその人神思想誕生の土台となるイワンの人間論のエッセンスと考えられる。以下にその要旨を纏めておこう。

——人間はその生来の弱さと愚かさゆえに、イエスが説く神に向かう自由も、その自由の上に立つべき信も受け容れ切れず、自分たちに託された自由をむしろ重荷とするだけであった。このイエスと人間との間にあって、イエスの人間に対する絶対の信と愛を知り、また人間本性の弱さと愚かさをも知悉し、かつその人間を愛さずにはいられない存在が大審問官であった。そしてこれら両者の板挟みの苦悩が大審問官を追いやった結論とは、神の名の下に人間に「地上のパン」を与えることであった。たとえそれが「天上のパン」に代る偽りの平安の付与であろうとも、またそれが彼らが大審問官の支配と管理の下に「ひれ伏させる」という隷属への道であろうとも、そのことにより人間は自由の重荷から解放され、ともかくは平安の内に憩うことが可能となるであろう。そして事実人間は嬉々として大審問官に自由を売り渡してしまったのだ。

イワンの目に映った人間と世界とその歴史の一切が、ここに煮詰められたと言えるであろう。一方にいるのは、イエスから示された神に向かうべき自由を、「地上のパン」欲しさに嬉々として大審問官に譲り渡してしまった愚かで弱き存在たる人間、つまり「永遠に背徳的で永遠に下劣な」「鷲鳥のような」人間たち。他方にいるのは、自ら「善悪の認識という呪いを背負い込み」、イエスの「偉業を修正し」、偽りの愛の名の下に哀れな人間を奴隷とするに至った「大審問官」。イワンにとりこの地上世界とはこれら「選ばれし少数の」大審問官たちと、その支配下にある大多数の「意気地なしで、哀れな子供のような」人間たちが占拠する世界なのだ。これら両者はとどのつまり、地上で人間に対する神の信と愛を生きて証し、「天上のパン」に彼らの目と心に向かわせようとしたイエスを裏切り、十字架上に追いやるユダたちに他ならない。イワンが提示しようとしたのは、神と人間に対するイエスの絶対の信と愛を無にする人間の現実そのもの、全人間がその全歴史を通じて示し

続けてきたイエス・キリスト疎外、「キリストの愛」の否定というユダ的現実そのものだったのだ。イエス・キリストの接吻に心を燃やされながらも彼を斥けた大審問官の姿とは、モスクワにおけるイワンの思索と認識の総決算であり、それは彼の人間への絶望と軽蔑が具体的な形を取って現われ出たものと言えるであろう。

人間への絶望と軽蔑、そして倨傲の精神

この「大審問官」に続く「地質学的変動」においてイワンは言う。——人間の内なる「良心」を葬り去り、「神という観念」を絶滅しさえすれば、後は「一切が許されている」。そして「人神」の時代が到来するであろう。だが「一体何時、そのような時はやって来るのか。もしその時が到来すれば一切は解決され、人類は最終的な安定を見るであろう。しかし人類に深く根差す愚かさを思えば、恐らく今後まだ千年はその安定はないであろう」（前回、第2章〔6〕）。「大審問官」から「地質学的変動」へ。ここに一貫するのはまずは人間の暗愚の現実というイワンの基本認識である。またここにあるのは人間に対する「キリストの愛」へのリアルな眼であると同時に、イワンが持つ悪魔の否定の精神であり、更にその底にあるのは、自らを絶対者・「人神」とする倨傲の精神であると考えべきであろう。

「兄さんは神を信じていない！」

イワンの「大審問官」に対するアリョーシャの反応を我々は既に見てある〔I〕。始めはこの劇詩をキリストの讃美としたアリョーシャは、しかし最終的には「兄さんは神を信じていない！」と叫ぶに至る。しかも彼はこの叫びを二度までも上げることに注意すべきであろう。彼は兄イワンが大審問官に「キリストの愛」を退けさせた劇詩の終局に、「ロシアの小僧っ子」イワンの神探求の不徹底と誤りを、そして彼の奥深くに潜む悪魔の否定の精神をはっきりと見て取ったのだ。アリョーシャにとり、イエスの生と死を通して見るべきは「キリストの愛」であり、またこの「キリストの愛」を通して見るべきは、何よりもまず人間に対する「神の愛」だったのだ。

もう一度、アリョーシャのイワンへの接吻の場面に戻ろう。この弟の接吻にイワンは心の底から感動させられたのであった。この時自らの感動を表わすにあたり、イワンは「愛の告白」という言葉さえ用いていた〔1〕。アリョーシャの接吻は「キリストの愛」を退けた兄に、もう一度「キリストの愛」を伝え直し、キリストが伝えようとした「神の愛」を一瞬でも思い起させ、彼の内なる倨傲の精神を無と帰せしめる接吻となったのだ。だがこの感動は飽くまでも一瞬のものでしかなかった。アリョーシャと別れた直後、既に深い憂愁の虜となったイワンを待っていたのは、そしてイワンが心の底から待ち望んでいたのも、スメルジャコフだったのである。

神認識の不徹底、「実行的な愛」と「目撃者」

イワンの内なる倨傲の精神と、神認識の不徹底。殊に後者の問題は既に作品が始まって

間もなく、「場違いな会合」において取り上げられることを見ておこう。ホフラコワ夫人がゾシマ長老に向かい、「死後の生」について次々と問いを投げかけ、それに長老が答える場面がそれである（二四）。この直後ゾシマ長老とイワンとの間でこの問題が取り上げられることから、ドストエフスキイはホフラコワ夫人の問題をイワンの問題への導入部として置き、この問題をここで予め浮き彫りにし、かつそれに正面からの解答も提示しようとした、作品構成上極めて重要な場面と考えられるのである。

ゾシマ長老にホフラコワ夫人が訴えたのは、死に対する恐怖であった。「死後の生が謎なのです！」「死後の生という考えが、苦しいほどに私の心をかき乱すのです。本当に恐ろしくなるほどに・・・」「ひとたび死んでしまえば突然何もなくなり、ある作家の作品で読んだように《墓の上におい繁るは山牛蒡だけ》ということにでもなったら、どうしましょう？恐ろしいことです！いったい何によって信仰を取り戻せるというのでしょうか？」「何によって証明し、何によって確信すればよいのでしょうか？」（二五）—— 畳みかけるように発されるホフラコワ夫人の疑問と恐怖。先に見たように、イワンによればこの「死後の生」「不死」の問題こそが、「神」の問題と共に「ロシアの小僧っ子」たちが正面から向き合う問題、喫緊の「世界的な問題」であり「永遠の問題」なのだ。美と富とに恵まれ、悩みなどとは無縁のような夫人もまた「ロシアの小僧っ子」の一人なのである。

夫人から迸り出てきたこの問いに対し、長老が返すのは優しくも厳しい答えだ。

チェーチェリナヤ・リュボフ
「**実行的な愛**の経験によってです。自分の隣人たちを飽くことなく実際の行動によって愛するように努めるのです。その愛の努力が実りをあげるにつれて、神の存在にもあなたの靈魂の不滅にも確信が持てるようになるでしょう。隣人愛における完全な自己犠牲の段階にまで至った暁には、その時こそあなたは疑う余地なく[神の存在も靈魂の不滅も]信じるようになり、最早如何なる疑いもあなたの心に忍び寄ることが出来なくなるでしょう。これはもう経験ずみのこと、確かなことなのです」（二四）

「実行的な愛」の積み重ねによって初めて、人は「神と不死」の存在への確信が与えられる。この「実行的な愛」あるいは「隣人愛における完全な自己犠牲」という言葉を語るゾシマ長老が土台とするのは、明らかに「善きサマリヤ人」の譬え(ルカ十 30-37)を語ったイエス・キリスト、十字架上で磔殺されるに至るまで神と隣人への信と愛を貫き生きたその姿であろう。ホフラコワ夫人も「善きサマリヤ人」の譬えを知らなかったことはまずあり得ない。だが彼女の有り余る富とそれがもたらす安楽は「実行的な愛」に一步を踏み出すこと妨げ、彼女の心の底からは底知れぬ死の恐怖とニヒリズムの冷気が吹き寄せていたのである。(夫人とその娘リーザが抱える問題については、拙著『カラマーゾフの兄弟論』前編Ⅰ・Ⅲを参照)。

福音書との取り組みから「キリストの愛」と出会い、「大審問官」の劇詩であれほどまでにキリスト讃美を繰り広げたイワン。その彼もまた「善きサマリヤ人」の譬えと、そこに

記された「実行的な愛」、あるいは「隣人愛における完全な自己犠牲」について知らなかったとはまず考えられない。だがホフラコワ夫人と同じくイワンもまた、「キリストの愛」との出会いを具体的な隣人への「愛の努力」に生かし、そこから「神と不死」への確信を与えられるという、ゾシマ長老が示す愛と認識の道を歩むことはなかったのだ。ちなみにこの「実行的な愛」の道が活写されるのが、ゾシマ長老の死後陥った闇の中でアリョーシャがグルーシェニカから与えられる「一本の葱」の場面であり（七三）、次いで彼が見る「ガリラヤのカナ」の夢である（七四）。ここで師ゾシマに導かれイエス・キリストと出会ったアリョーシャは、更に満天の星空の下、いよいよ神との出会いを遂げるであろう（七四）。「隣人愛」から「キリストの愛」へ、そして「神の愛」へ。アリョーシャの回心体験を刻むドストエフスキイの筆は、ゾシマ長老が夫人に示した宗教的認識のプロセスをそのまま表現したものと考えられる。

イワンもまたアリョーシャと同じく、「神と不死」の探求に燃える「ロシアの小僧っ子」であった。だがこの青年は神とイエス・キリストと隣人という、宗教的認識に不可欠な三つの要素とプロセスの全てを中途半端なままに食い散らし、つまりは神認識の不徹底な矛盾・分裂体として、人間と世界とその歴史についての「目撃者」に留まる高度な知的エリートであったと判断すべきであろう。イワンは更に悪魔の否定の精神に自らを譲り渡し、神を否定し、イエスと「キリストの愛」を斥けた末に自らを神とし、その心の底から吹き寄せる恐るべき虚無感と恐怖感に脅かされていったのであろう。

この事情を明白に証言するのは、裁判の前夜イワンの前に現れる悪魔である。イワンの内なる悪魔は「僕にはとても理解できない何か太古からの定め」に衝き動かされ、否定の役割を引き受け続けて来たことを語り、その結果が如何に恐ろしいものであったかを語る。

「僕は苦しんでいる、だが生きていない。僕は不定方程式のXだ。僕は何か人生の幻影のようなもので、全て始めも終わりもなくしてしまった。そして自分を何と呼ぶのか、遂には自分の名前まで忘れてしまった」（十一九）

自分の名前まで忘れてしまうほどの存在感覚の喪失。恐らくこれがモスクワにおいて悪魔の否定の精神に身を委ね、神を否定し、イエスと「キリストの愛」を排斥したイワンの現実だったのであろう。「悪業への懲罰」は既に始まっていたのだ^{[3](1)}。

なお「目撃者」とは、苦学生としてのイワンがモスクワで生活の資を得るため、新聞に雑報記事を売り込む仕事をしていた頃に用いていたペン・ネームである。自ら考案したこの名前が、図らずも彼自身の思索と生の在り方をそのまま映し出すという皮肉を彼は生きていたのだ。

モスクワのイワン

以上我々はモスクワ時代のイワンの思索の跡を辿ることで、彼の精神史の概略を見通せ

る地点に至ったように思われる。繰り返しとなるが、改めてモスクワにおけるイワン像を纏めておこう。

彼が残した思索の足跡とは、まずは「神と不死」を熱烈に求める「ロシアの小僧っ子」の足跡であり、見事な一直線をなすものである。だがよく見るとこの直線は「肯定と否定」、全く相反する逆方向の足跡が刻む直線であり、我々はそこに彼の思索における痛ましい試行錯誤、未熟さと矛盾・分裂の痕跡を認めると同時に、その思索が持つ悪魔的意図的な過誤と「叛逆」の痕跡をも認めざるを得ない。決定的なことは、地上を覆う不条理、罪なき幼な子たちの涙に目を釘付けにされ、その涙を贖うべき存在を切に求める彼が福音書のイエスと出会い、その十字架に示された「キリストの愛」に感動しながら、彼自身はその「目撃者」に留まり「実行的な愛」に踏み込むことはなかったことであろう。イエス・キリストが神を示す指を見つめながら、イワンは神そのものには目を向けなかったのである。

「キリストの愛」に強く感動させられるイワンをして、神に目を向けることを拒否させ、かつ「実行的な愛」を生きることを妨げたもの。——「大審問官」の劇詩とそれに続く「地質学的変動」の人神思想を検討してきた我々は、それがこの青年が宿す悪魔の否定の精神、あるいは自らを絶対者・「人神」とする倨傲の精神であると判断せざるを得ない。それはまた彼自身の人間と世界とその歴史に対する深い絶望と表裏一体のものであることも明らかとなった。かくしてイワンはその否定の精神がもたらす存在の只ならぬ高揚感と、逆に懼るべき存在の喪失感覚という、相反する両極的な感情を抱えたまま、つまりは矛盾・分裂を深く内に宿す「ロシアの小僧っ子」として故郷の家畜追込町に乗り込むのである。

このイワンの前にスメルジャコフを置く時、我々の目にまず映るのは、運命の理不尽さと醜悪さが彼の内に刻んだ闇の深さである。この青年はこの闇の中から白い眼を外に向け、父親に対し、異母兄弟たちに対し、祖国とロシア民衆に対し、そしてイエスに対して呪詛を投げつけていたのだ。人間と世界とその歴史に対する深い絶望という点で、スメルジャコフもイワンも同一線上に立つと考えるべきであろう。またイエス・キリストに対する姿勢ということでは、イエスに対して痛烈な呪詛を投げつけるスメルジャコフと同じく、イワンもまた「キリストの愛」に深く感動しながらも、結局はそれを否定し去ったという点で、やはり二人は同一線上にあると考えるべきであろう。

様々な相違点を抱えつつも、人間への深い絶望と「キリストの愛」の拒否という点で繋がるイワンとスメルジャコフ。ドストエフスキイはこれら二人の異母兄弟を家畜追込町で出合わせ、交流させ、父親殺しへと向かわせ、そしてその先、更に何処に導こうとしているのか。

3. 帰郷、父親殺し、そして逃走

(1) 帰郷の目的

前回から確認しているように、イワンの帰郷の目的は大きくは二つあったと考えられる。一つは、カチェリーナとの恋に何らかの決着をつけることであり(五三)、もう一つは「地質学的変動」において完成を見た人神思想、その真理性と現実性を故郷の家畜追込町で実証すること(十一九)、これら二つである。恋と思想実験、これらにもう一つ付け加えるならば、父フォードルとの対決、あるいは自らの出自の確認ということも挙げられるであろう。

思想実験

カチェリーナとの恋は措いて、帰郷後のイワンの足跡から判断すると、思想実験の方は自らの人神思想の宣布と聖者ゾシマ長老との対決という二つを核とするものであったと考えてよいであろう。これらはゾシマ長老の庵室で繰り広げられる「場違いな会合」において明白となる。既に指摘したように、そもそもこの集まり自体を設定したのがイワンだったのだ。この場では地主のミウソフによって、イワンが町の上流階級の婦人たちの集まりで「地質学的変動」の思想を説いていたことも暴露される(前回、第2章⁵)。

ところで作品構成上からはこの会合の場とは、作者ドストエフスキイがイワンに故郷滞在の総決算をさせる場と考えられる。ここでイワンはモスクワ以来育んだ思想を、更に故郷で宣布を計ってきたその思想を、ゾシマ長老にぶつけるのだ。それと同時にこの場とは、彼の思想の含む矛盾・分裂が逃げ場なくはつきりと露呈させられる場ともなるのである。我々はいまも、長老とホフラコワ夫人との対話から「実行的な愛」の問題を取り上げ、これが夫人ばかりかイワンにとっても極めて重大な意味を持つものであること、しかもここに彼の認識上の致命的な欠陥が存在することを確認したばかりである。またこの会合で「教会裁判論」を巡りイワンが語る破門者論については、我々は既に前回スメルジャコフの棄教者論との関係で検討済みであるが(同上)、この破門者論こそイワンのモスクワ時代の思索の到達点たる「地質学的変動」のエッセンスとも言え、彼はこれをゾシマ長老にぶつけるのだ。

だが前回我々は、この破門者論によってイワンが長老を論破して、所期の目的を達したのかどうかについてはまだ確認していない。結論から言えば結果は逆で、イワンはゾシマ長老によってその思想の未熟さ、あるいは綻びを完膚なきまでに見破られてしまうのである。以下でこの点を確認しておこう。

人間の罪を裁く主体は究極どこにあるのか。「教会裁判論」を巡りイワンが展開した破門者論に対してゾシマ長老は、神は人間の良心に罪意識を介して臨むこと、罪人への神の厳然たる裁き、すなわち「悪業への懲罰^{カラ}」が存在すること、それが「キリストの律法^{ザコン}」であることを諄々と説き聴かせる。長老はイワンが、人間の罪を究極において裁き司る神について知らぬまま、滔々と罪と教会の裁きについて論じるその思索の観念性と認識の不徹底を見抜き、彼が「神と不死」の問題でなお「肯定と否定^{フロ コントラ}」の間を揺れ動く青年でしかないことをはつきりと見て取ったのだ。だが最後にゾシマ長老はイワンに対し、彼が「肯定と否定」の矛盾・分裂の苦しみの内にいることへの深い理解を示し、やがて彼がそこから抜

け出て、最終的にその「崇高な心」が「肯定」の答えを見出すことへの励ましの言葉を贈る。その際長老はパウロの言葉を引き、イワンが「高き」にいます神を、そして「天の住まい」を求めること、また彼が神から祝福を与えられることへの祈りをも加えるのである。

「肯定的な方向に解決されない限り、決して否定的な方向にも解決されません。あなたご自身がご自分の心のこのような特性をご存知でしょう。そしてそこにこそ、あなたの心の苦しみの全てがあるのです。だがこのような苦しみを苦しむことの出来る崇高な心をあなたに授けて下さったことで、創造主に感謝することです。

《高きを惟い、高きを求めよ。

《我らが住まいは天にあり》(コロサイ書三 2,1、ピリピ書三 20)

神があなたの心の解決を、あなたがまだ地上にある内にあなたにお与えなさるよう。そして神がどうかあなたの道を祝福なさいますように！」(二六)

これは未だ神を知らずして神を論じる「ロシアの小僧っ子」イワンの未熟さと、その思想が隠し持つ過誤と悪魔性を見抜き、彼の思想実験の破綻と「悪業への懲罰」を宣言し、かつ予言するものであるばかりか、更にその先にある神の赦しと愛についての、ゾシマ自身の確信を表明した預言とも言えるであろう。ここにあるのは作品冒頭近くの第二篇にして既に、モスクワ以来のイワンが抱える「肯定と否定」、その矛盾・分裂の泥沼を我々読者の前に曝け出し、彼がこの先迎るであろう茨の道をゾシマ長老に予言させる、あの「観照者」としてのスメルジャコフ像の提示と同じく、ドストエフスキイの見事に周到な作品構成である。

ちなみに「場違いな会合」におけるゾシマ長老との対決の翌日のことである。イワンは料亭「みやこ」でアリョーシャとの対決をするのだが、この夜彼が息を殺して階下の父の動静を窺っていた頃、修道院ではアリョーシャたちの見守る中をゾシマ長老が最期の息を引き取る。そしてフォードルが殺害されるのは、その翌日の夜のことだ。先も指摘したが、我々が目撃する『カラマーゾフの兄弟』のドラマとは、故郷におけるイワンの思想実験が、モスクワ以来内包させていた思想の矛盾・分裂を曝け出すことによって、大団円に近づきつつある時のドラマなのである。ゾシマ長老に続いてアリョーシャ、これら二人との対決によって作者ドストエフスキイは、イワンの破綻を白日の下に曝すと共に、この青年に新たな道を指し示しているとも言えよう。彼がスメルジャコフと共に乗り出す父親殺しとは、このような文脈上にある思想実験であることを確認しておこう。

父親との対決

父親との対決。イワンの帰郷の目的として、この点について直接記されることはなく、勝手な想像は許されない。だがイワンが帰郷の時点で、既に実際の「父親殺し」まで念頭に置いていたかどうかは疑問とすべきであろう。イワンは早くも十歳の頃から、自分が「他

人の情けで生きている」ことを承知し、故郷の父が「その名前を口にすることすら恥ずかしい人物」であることも知り、大学生活の前半で苦学生としての生活を強いられても、父親に手紙一つ出そうとしなかったとされる(一三)。独立不羈の精神の持ち主がイワンなのだ。このイワンが帰郷後、父フョードルの家に住むことになったことについて、そこに何らかの底意があったと考える必要はないであろう。アリョーシャもまた帰郷後は、父フョードルの許に身を寄せているのだ。母の遺産を巡って父と骨肉の争いを繰り広げる長男のドミートリイは別として、家長フョードルに息子たちを家に迎え入れる度量がなかったと考える必要はないであろう。帰郷時のイワンの内にあったのは、今までも見てきたように、まずはカチェリーナの存在であり、また故郷の町で「地質学的変動」の思想の真贋を試みようとする心、その高揚感であったと考えられる。父親フョードルについては、大学を卒業して新たに西欧に旅立つ(一三、五三)前に一度故郷に戻り、自らの出自をこの目で確認しておこう、母親の死と共に幼い自分を「忘れ去り、棄て去った」父親の本性を突き止めてみようとの、冷やかな「目撃者」の心程度であったと考えるのが妥当なところであろう。

軽蔑から嫌悪感、そして殺意へ

だがいよいよ間近に見る父フョードル。イワンはこの父が、ひたすら金と酒と女に生きる「好色漢」であり「卑劣漢」であり「道化」であることを目の当たりにする。「親父は七十になるまで[生の]盃から口を放すことはないだろう。それどころか八十までもと夢見ているのだ。これは自分でも言っていたことだ」(五三)。イワンがアリョーシャにした報告である。帰郷と共に「だらしのない子豚も同然」(十一四)の父親を目の当たりにするにつけ、イワンの内では父親を冷やかに見つめる目が間もなく軽蔑の目へと転じ、遂には殺意を含んだ嫌悪感にまで高まっていったのであろう。このような推測を我々に可能にさせるのは、スメルジャコフが棄教者論を説いた後(前回、第2章⁴)、部屋から追い出された場面に続く二つの章である(三八・九)。ここでは今までも見てきたように、フョードルがイワンとアリョーシャを相手に、自らの信仰論に続いて彼ならではの女性観を吐露する場面から、更には家に飛び込んできたドミートリイによって殴り倒される修羅場に至るまで、フョードルという存在を浮き彫りにする様々なエピソードが描き出されるのだ。それらの中から一つを見ておこう。(三八 / フョードルの独自性については「ドストエフスキ研究会便り(2)H」)。

フョードルがイワンとアリョーシャに向かい、「神はあるのか、ないのか?」「不死はあるのか、ないのか?」と畳みかけるように問いを發した後のことである。続けてフョードルは二人の息子たちに自分の女性遍歴を誇り、名うての好色漢ならではの女性観を披露する。その延長で話題は二人の亡き母ソフィアに移る。フョードルが語ったソフィアについての思い出話の一つとは、彼が新妻ソフィアの信仰心の篤さに嫉妬し、聖母マリア祭の日、ソフィアが祈る聖母像に唾を吐きかけるという衝撃的なエピソードである。この話を聞いていた宗教的痴愚のアリョーシャは、「狐憑き」とも呼ばれた宗教的痴愚の母と全く同じ反応を示し始める。彼は叫び声を上げたかと思うと両手を打ち鳴らし、顔を覆ってなぎ倒さ

れたように椅子に倒れ掛かり、突然声にならぬ涙にむせびつつ、ヒステリー発作さながらに身体を痙攣させ始めたのである。仰天したフォードルはイワンに、口に水を含んでアリオージャに吹きかけてやるように呟く。「これは、自分の母親のことで、自分の母親のことでな……」。必死に説明を試みようとするフォードルはこの時、アリオージャの母ソフィアがイワンの母でもあったことをすっかり忘れてしまっていた。ギラリと目を閃かせたイワンから、怒りと侮辱に満ちた叫びが迸り出る。「しかし僕の母親もまた、彼の母親と同じだったと思いますがね、どうですか?」。春の帰郷から夏の終わりまで、恐らくイワンはこのような父を少なからず目撃していたのであろう。

この直後のことだ。フォードルは家に飛び込んできたドミートリイによって殴り倒され、血まみれになる。この大騒動の後、イワンはアリオージャに向かい冷然と言い放つ。「二匹の毒蛇が食い合っているのだ」。更に彼は自分が父親の死を「期待する権利を保留する」とまで宣言するのであった(三九)。また当のフォードル自身もアリオージャに向かい、スメルジャコフが家族全員に対して抱く敵意を指摘し、更には息子イワンに対する恐怖心をも表明することは前回も見た通りである(第二章^[6])。「俺はイワンが怖い。あいつ[ドミートリイ]などよりもイワンの方が怖いのだ。怖くないのはお前ひとりだけだ……」(三九、四二)。カラマーゾフ家において、父親の死は既に遠い異国の話でも遙か昔の話でもなくなっていたのである。

(2) スメルジャコフとの出会い

「一切が許されている」

家畜追込町への帰郷。前回見たように(第二章^{[5]・[6]})、心逸るイワンをまず惹き付けたのは彼の異母兄弟、カラマーゾフ家の料理係の下男として働くスメルジャコフであった。筆者はイワンが直ちにこの「一風変わった」人物に目を止め、大きな関心を抱き、彼が自分に近づいて話をするよう自ら仕向けさせたと記す(五六)。イワンとの永遠の別れの直前、スメルジャコフが回想する二人の「寺子屋」時代の雰囲気を、再度確認しておこう。

「[自分が父親のフォードル殺しに至ったのは]《一切が許されている》と考えたからです。このことは本当にあなたが教えて下さったのですよ。あなたはあの頃色々とお話をして下さいました。というのも、もし永遠の神がいなかったら、いかなる善行もありはしない、そもそも善行など何の必要もないのだと。あなたは本気でした。それゆえ私もそう考えたのです」(十一八)

スメルジャコフの孤独の中に突如現れたのがイワンであった。「一切が許されている」。人間を縛るものなど何もない。良心もそして神さへも。イワンの「地質学的変動」の人神思想が、青天の霹靂のようにスメルジャコフの心を打ったことは想像に難くない。イワンの人間への絶望と軽蔑も、スメルジャコフの心の深くに強く響くものがあつたに違いない。

「あなたは本気でした。それゆえ私もそう考えたのです」。だが運命に対する怒りと呪いと復讐心が貫くこの青年の心の内で、具体的に何が起こったのか、また何時如何にして彼は父親殺しに向けて動き出したのか、筆者は何も記さない。様々な推測の可能性はあるが、我々は出来るだけ筆者が与える情報の上に立ち、この沈黙の前後を知るように努めよう。注目すべきは、筆者がスメルジャコフの心が父親殺しに結晶してゆくプロセスを、専らイワンの視野から描いていることだ。

出合いの熱気の変質

出合い当初の感動と熱気。そしてカラマーゾフ家の新たな「寺子屋」における人神思想の伝授。だがやがてイワンは、スメルジャコフが示す思考の「支離滅裂さ」というよりは、その思考の「落ち着きのなさ」に突き当たる。筆者は、彼が投げかける「何か遠回しで、明らかに考え抜かれた質問」の捉え難さが、イワンをますます苛立たせていったと記す。またイワンはこの異母兄弟が駆り立てられている「執拗な不安」に目を見張らされ、その奥に蠢く「測り知れぬ自尊心」に、更には「傷ついた自尊心」の存在にも気づくに至り、遂には「嫌悪感」を感じさせられるまでに至ったと記される（五六）。

イワンが突き当たったのは、スメルジャコフの内深くに潜む深い闇であり、自らが投げ込まれた理不尽で醜悪な運命に対する激しい呪いと復讐心だったと考えてよいであろう。既に繰り返し見てきたように、それは父親フォードルばかりかイワンも含む異母兄弟たちに対しても、そして祖国とロシア民衆に対しても、更にはイエスに対してさえも向けられる痛烈な憎悪と叛逆の心であり、呪いと復讐心だったのだ。フォードル殺しとは、何よりもまずこのスメルジャコフの内なる闇、その「傷ついた自尊心」から生まれた運命への復讐劇であったと考えるのが自然であろう。彼はイワンとの出合いを契機として、またグルーシェニカを巡る父親と長兄との争いの劇化に乗じて、一気にその復讐劇の実行に乗り出し、フォードルの脳天目がけて鉄槌を振り下ろすのだ。

かくしてイワンがスメルジャコフの「不安」に驚かされ、その「傷ついた自尊心」にも気づき、遂には「嫌悪感」を抱かされる頃には、既にスメルジャコフは先に見たイワンの父親に対する嫌悪感、あるいは殺意を敏感に察知しており(十一七)、その内なる手には「斧」が握られていたと考えてよいであろう。群を抜くスメルジャコフの知力は、我々には周知のものであるが、いざ父親殺しの具体的な実行へと向けて歩みを始めるや、彼が積み上げた段取りの周到さと綿密さには驚くべきものがある(十一八)。イリュージョン少年を巻き込んだのジューチカ事件は、この父親殺しの成就に向けた心逸る序曲だったのであろう(十四)。

(3) 別れゆく道。

主従関係の逆転？

さて父親殺害の経緯を辿る中で、我々読者が突き当たり困惑させられる一つの大きな壁、あるいは謎がある。それは裁判の直前まで、イワンにはスメルジャコフが仕組んだ殺人劇

の全貌も細部も、それへの自らの加担の程度も殆ど何も把握し切れぬままにいたように見えるということである（十一 6、7、8）。モスクワ帰りの若旦那イワンの「一切が許されている」とする人神理論は、運命への怨念を胸に秘める下男スメルジャコフに、その復讐劇への理論的根拠を与え、彼に父親殺しへの道を指し示したのであった。だがいざこの「前衛的肉弾」がその実行に向けて始動し始めると、奇妙なことにイワンの心には怯えと躊躇が生じ、あわよくば逃げ出そうとしているかのような印象さえ与えるのである。そればかりかイワンは、そもそも自分の内に存在した父親への殺意さえ、確かなものかどうか曖昧になってしまったかのようにも見えるのだ。

下男が「前衛的肉弾」として一人先を歩み、若旦那は遠く置き去りにされる。蛇に睨まれた蛙から、蛙に睨まれた蛇へ。主従関係の逆転。これはこれで、この作品のドラマ展開に向ける視点として斥けることの出来ないものであろう。だがこの視点からは、モスクワより「地質学的変動」の人神思想を携えて颯爽と登場した若旦那イワンが、下男スメルジャコフの策略にまんまと引っ掛かり、父親殺しに引きずり込まれ、遂には「卑劣漢」の意識を土産にモスクワに追い返されるという、なんとも惨めで滑稽なイワン像しか浮かび上がらないであろう。その延長線上に、冒頭で見たイワンの姿を置いてよいものであろうか。

怯えるイワン、高揚するイワン

我々はイワンのこの怯えの奥に、もう一つのイワンの姿があることを見落としてはならないであろう。主従関係の逆転、この視点は飽くまでもイワン像の半分であり、もう一つの視点を加えて初めて、この時のイワンの全体像が浮かび上がると考えるべきであろう。

真夜中、階段の上から息を潜め父の様子を窺うイワンの姿、ここに我々はただ恐怖感に捕らわれ、怯え躊躇するだけのイワンを見てはならない。ここには同時に、いよいよ父親殺しという懼るべき血の一线の踏み越えに乗り出し、密かに興奮し身震いするイワンがいることも読み取るべきと思われる。

冒頭で見たように筆者は、この時イワンが自分の行為を「生涯で最も卑劣な行為」と考えていたと記し、更に彼の心を説明することは難しいとも記す。そのわけは、それが「思考の流れ」というよりは、「桁外れの興奮」がもたらした「何か非常に漠然としたもの」であったからだというのだ。つまりこのイワンの姿とは、スメルジャコフの軍門に下った哀れな若旦那イワンの姿であると同時に、下男スメルジャコフを「前衛的肉弾」として、いよいよ血の一线を踏み越えようとして「桁外れの興奮」の内にある若き思想家の姿でもあると考えるべきであろう。モスクワ以来のイワンを踏まえる時、そしてまた彼の帰郷の目的について思い合わせる時、我々がこのイワンの内に見出すのは、「人類七千年の習慣」によって縛られた「良心」を、いよいよかなぐり棄てようとする青年の身震い、「一切が許されている」とする自らの思想の真贋を、実際に血の一线を踏み越えることで試みようとする彼の心の逸り、その高揚感だと判断すべきだと思われるのである。

イワンの最深奥にあるもの

更に言えばこの時イワンを領していたものとは、カチェリーナをもアリョーシャをも、そしてスメルジャコフさえをも超えて、彼自身の心の最深奥から吹き上げてくる、相反する二つの根源的感覚であったと我々は考えたい。それはモスクワ以来の生と思索の一切を「地質学的変動」の人神思想に凝集させ、更にその思想の真理性と現実性を「父親殺し」として試みようとするイワンの抑え難い悪魔的高揚感であり、同時にその彼の心の底から吹き寄せてくる懼るべき恐怖感でもあったと考えられるのである。

我々はその高揚感と恐怖感の更に向こうには、彼が天上に追放した神と、それに続いて排斥したイエスと「キリストの愛」があることも考慮すべきであろう。これら「神殺し」と「イエス磔殺」と、そして新たな「父親殺し」という三重の一線の踏み越えが「人神」イワンに与えたものとは、一方では測り知れない悪魔的高揚感であったと同時に、他方ではおよそ耐え難い、超越的恐怖感とも呼ぶべき懼るべき裁きの感覚でもあったのではないだろうか。真夜中、息を殺して階下の父の動静を窺うイワンの内にあったものとは、これら相反する両極的感情であったと考えて初めて、彼の怯えと躊躇の奥行きは真に理解され、また筆者が「桁外れの興奮」がもたらした「何か非常に漠然としたもの」と呼ぶものも、またスメルジャコフとの別れ際に彼が出し抜けに発した「どうにも説明がつかぬ類いの」あの高笑いも説明がつくように思われるのである。

法廷のイワンが向き合ったもの

イワンが向き合っていたものの奥行きと懼ろしさを知らるために、法廷でのイワンにも目を向けておこう。前夜スメルジャコフから受け取った三千ルーブリの札束を取り出して見せた後、イワンは裁判長に向かって言う。「父を殺したのは彼 [スメルジャコフ] であって、兄 [ドミートリイ] ではありません。彼が殺し、私が彼に殺すよう教唆したのです・・・誰が父親の死を望まないのでしょうか?・・・」(十二5)。裁判長が思わず口にする。「あなたは正気なんですか、どうなんです?」。これに対して返ってきたのは驚くべき答えであった。「正気かどうかとお尋ねですが・・・実は[僕は]卑劣なほどに正気なんです。あなたと同じように、そしてまたここにいる・・・豚どもと同じようにね」。彼は聴衆の方に振り返る。「[奴らは] 父親を殺しておきながら、驚いたふりをしていやがる」。凶暴な侮辱感に捕らわれて彼は歯ざしりをしたとされる。「お互いにしらを切りやがって。嘘つき野郎らが! 皆が父親の死を望んでいるんだ。毒蛇が互いに食い合っているんだ・・・父親殺しがないとなると、連中は皆腹を立てブーブー言いながら帰ってゆくんだ・・・[連中が望むものとは] 見世物なんだ! 《パンと見世物!》なんだよ。だが、こういう俺様とてご立派なものですよ! 水はありますか、僕に飲ませて下さい、後生です!」(十二5)。

鬼気迫る場面である。ここにいるのは人格解体の崖を真っ逆さまに転げ落ちつつあるイワン、その意識さえ解体しつつあるイワンであり、同時に「卑劣なほどに正気」なままに自らの心の内を、そして全人間の心の内を暴露し糾弾するイワンである。作者ドストエフ

スキイがこのイワンに向き合せているもの、それは目の前の法廷の裁判長や法廷の聴衆だけではない。それと同時に、否それよりもむしろ、彼らの向こうにあるもう一つの法廷であり、そこに座す「裁きの神」と考えるべきであろう。彼はその神に向かい、自分が父親殺しの正犯であることを告白し、かつ人間全てが「父親殺しを望んでいる」ことを暴露したのだ。この視点から捉えない限り、ここでイワンが語る言葉の全てはその真の奥行きと懼ろしさを明らかにしないであろう。このことを理解するために我々は一瞬、更にこの裁判の前夜に戻らねばならない。

神との出会い

法廷への出廷の前夜、イワンがスメルジャコフと三度目で最後の対決をした時のことである。スメルジャコフによってイワンは、父親殺しに対する自らの罪を最終的かつ決定的に自覚させられ、同時に神に見つめられる自分を発見するに至る。「神が見ておいでだ」(十一8)。イワンにとり父親殺しの罪の自覚とは、そのまま神との出会いでもあったのだ。この決定的な場面については、後で改めて確認しよう(本章6、最終回第6章)。

かくして我々が翌日目にするのは、法廷の裁判長と聴衆の前で、父親殺しの「教唆犯」としての自らの「^{プレストプレーニエ}犯罪」[刑法上の罪]を自白するイワンであると共に、裁きの神の前で、「聖なるもの」「高きもの」そして「力あるもの」を抹殺する「正犯」としての自らの「^{グレフ}罪」[宗教上の罪]を告白するイワンでもある。「ロシアの小僧っ子」イワンの「神と不死」探求の旅は、この二重の法廷での二重の罪の告白を以ってひとまずの幕を閉じるのである。

(4) 逃走

「生涯で最も卑劣な行為」の先

話を父親殺しに戻そう。「一切が許されている」。既に見たように、この観念の刃はイワンの手を離れ、彼の「前衛的肉弾」スメルジャコフが手にする武器となったのであった。更にこれは密かに少年イリュージンにも手渡され、仔犬のヂューチカがパンの塊と共に呑み込まれるピンに転じ、遂にはスメルジャコフ自身がフォードルの脳天めがけて振り下ろす文鎮へと変じたのである。フォードル殺害は、イワンの内なる高揚感が遂に恐怖感によって追い払われ、「卑劣漢」の痛切な自覚と共にモスクワに逃げ帰った日の夜のことだ。

モスクワから家畜追込町に呼び戻されたイワンが、この後スメルジャコフとの三度にわたる対決により、自らの罪を最終的かつ決定的に自覚させられるまでの二か月とは、彼が神との出会いを果たすまでの二か月であり、またスメルジャコフを死に追いやる二か月であり、そしてまた法廷での自白を果たした後に「死の床」に臥すまでの二か月でもある。書かれずして終わったこの作品の後篇において、恐らくは「死の床」から再び立ち上がるであろうイワンを待ち受けるのは、「神殺し」と「イエス磔殺」と「父親殺し」、そしてこれから見る「兄弟殺し」という何重もの十字架を負った新たな茨の道、想像を絶する過酷な生であることが予想される。だが我々は作者ドストエフスキイが、作品の終わり近くで

ドミートリイに、イワンの未来について次のような予言をさせていることも見ておこう。

「聞け、兄弟イワンは全員を超える。生きるべきは彼で、俺たちではない。彼は回復する」(エピローグ2)

イワンの新たな生を描き、そして生きるのは、我々読者に課せられた課題である。

ところでイワンが「死の床」に臥すまでの二か月とは、同時にスメルジャコフが自らの犯した罪と対峙し、その罪を介して神と向き合い、遂にはその神の前で自らの命を「絶滅させ」、「聖都エルサレム」への巡礼に旅立つまでの二か月でもある。ここに展開するのは、神の裁きが父親殺しの兄弟二人の良心に臨む懼るべき「悪業への懲罰」現前のドラマであり、そこには二人の苦悩に寄り添うアリョーシャの姿も認められるであろう。

以下の⁴では、イワンが最終的な罪の自覚と神との出会いに至るプロセスを見据えつつ、同時に第一篇からの主要テーマであるスメルジャコフにも的を絞り、この「傷ついた自尊心」を内に秘めた青年が運命への復讐を遂げた後、果たして何と出会い、如何なる終局に至るのかも確認してゆこう(拙著『カラマーゾフの兄弟論』後篇Ⅶも参照)。

4. 「悪業への懲罰」 — 三度の対決 —

「殺したる後^{ころ}ゲヘナ^{のち}に投げ入る^な權威^{いる}あるもの^{ちから}」

イワンをたじろがせるような冷静さを以って、父親殺しに向けて悪魔的とも言うべき周到で綿密な準備を重ねたスメルジャコフ。だが彼もまた、実際に血の「一線を踏み越える」ことは容易なことではなかった。彼自身フォードルの殺害自体は、酒場で酔いに任せて父親殺しを公言していたドミートリイの手になることを期待していたのだ。その計算が外れたことが判明するや、直ちに彼は決断する。「正にこの場で、一切のけりをつけてしまうのだ」(八4)。—— 決断の時の心の震え。フォードルの部屋に踏み込むや襲われた恐怖と足のすくみ。父の脳天に文鎮を三度振り下ろした時の感触。再び癲癇の仮病を装うべくベッドに戻り、横になって捕われた恐怖。二か月が経ち、これらをイワンに告げる時でさえ、スメルジャコフは「興奮し、苦しげに息をつき、その顔には汗が浮かんでいた」と記される。『罪と罰』のラスコーリニコフ以来、血の一線を踏み越えた者たちが追い込まれたパニックを、スメルジャコフもまた免れることは出来なかったのだ。いざ父親が殺されるや、以前の悪魔的高揚感は吹き飛び、底知れぬ恐怖感に脅かされつつも、最終的な罪の自覚からはなお遠くをさ迷うイワンとは対照的に、実行犯スメルジャコフに対して「活ける神の御手」(ヘブライ人への手紙十31)は、直ちに懼るべき裁きとして臨んだのである。

スメルジャコフが捕えられた懼れ、それを最も的確に言い表すものは、ルカ福音書が伝

えるイエスの次の言葉を措いて他にないであろう。

「わが友たる汝らに告ぐ、身を殺して後に何をもし得ぬ者どもを懼れるな。懼るべきものを汝らに示さん、殺したる後ゲヘナに投げ入る權威あるものを懼れよ。われ汝らに告ぐ、げに之を懼れよ」(ルカ十二4-5)。

ラスコーリニコフと同じく、また若きゾシマを訪れた「謎の客」ミハイル(六2D)と同じく、ドストエフスキイはスメルジャコフをもイワンをも共に、父フョードルの「身を殺して後」「ゲヘナに投げ入る權威あるもの」の前に立たせたのだ。父親殺害後の二人を描くドストエフスキイの筆は、それぞれのタッチは全く異なるものでありつつも、一貫してこの「活ける神の御手」の裁きの懼ろしさ、あるいはゾシマ長老がイワンに語る「悪業への懲罰」(二5)に向けられる。『カラマーゾフの兄弟』後半のクライマックスたる二人の対決を、この「懼るべきもの」現前のドラマから目を逸らせて追うことは、裁きの神から罪人に吹き寄せる超越的恐怖感の言語化という、『罪と罰』以来のドストエフスキイの刻苦苦闘から目を逸らすことになってしまうであろう。

「ゲヘナ」のドラマ

三回にわたって報告されるイワンとスメルジャコフとの対決。それらは二人の異母兄弟によるそれぞれの罪との対峙の記録であり、またそれぞれの「ゲヘナ」における神との出会いの記録である。だがドストエフスキイの筆はラスコーリニコフの場合から一貫して、血の一線を踏み越えた人間に臨む「活ける神の御手」を、目に見える至高の力や栄光によって描き出すような安易で画一的な道を取ることはない。罪人たちに対する神の裁き、「悪業への懲罰」は、それぞれの罪人に即して、まずは彼らの魂に臨む恐怖や慄きや憂愁などの原初的感覚感情として刻まれてゆくのだ。以下ではこのことを念頭に置き、二人の三度の対決を確認してゆこう。それらは既に第1章でも概観し(2)、最後の第6章においても検討するため、徒に細部に立ち入ることは避けたい。我々が光を当てるのは、既に齟齬をきたしていた二人の心が、血の一線の踏み越えの後、如何に更に遠く離れ、異なったそれぞれの道を歩むに至るかの過程ドラマに対してである。

(1) イワンの一度目のスメルジャコフ訪問

「正にこの神様」

モスクワに帰ったイワンはその四日後、父の死の知らせを受け取るや故郷に舞い戻り、その日の内に病院を訪れる。彼が目にしたスメルジャコフは、父親殺害のパニックの中で真正の癲癇発作に襲われ、意識不明のまま病院に運び込まれ、今もなお肉体はこの上なく衰弱していた。だが彼の意識は明晰であり、イワンから発される今更ながら的を外れな問いを逸らす知力も論証ぶりも、病人とは思われぬ切れ味を示すのであった。既に逆転して

いた力関係は変わることなく、対決は完全にイワンの敗北で終わる。

この対決において注目すべきは、スメルジャコフが次のような形で神の存在を口にする
ことである。

「今だって、この私たちの話を聞いている者など誰もいません、サーマバ・エータバ・ブラヴィデューニヤ正にこの 神 様
以外には」(十一6)

会話の流れからすれば、これは取るに足らぬ言表でしかない。彼は更にもう一度、些細な文脈でだが、神の名を口にする。だがそもそも聖書に通暁し、信の人グレゴリーイを手手玉に取り、フョードルからは「ジェズイット」とも呼ばれるスメルジャコフが、神の名を口にすること自体何ら珍しいことではないだろう。そうでなくともスメルジャコフの言葉遣いは舌足らずで、文法的にも不正確なものである。とは言え一点、いささか奇妙な響きを持つのは「正にこの神様」という表現である。「正に」という強調語を加えた「この」という限定詞で、スメルジャコフは何を指していたのか。彼が身近に神の気配を感じていたと判断できる材料は直接見当たらず、またイワンも彼の言葉に何の反応も示さない。例によって筆者の説明は何もない。我々にはこれ以上の立ち入った推察は不可能である。二人の対決を更に第二回目、第三回目と追ってゆくことから浮かび上がる大きな文脈の中で、この奇妙な表現が持つ意味が明らかとなる可能性に期待しよう。

「悪業への懲罰」

だがその文脈については、実は我々は既に確認済みなのだ。つい今我々は、フョードル殺害直後のスメルジャコフが襲われた恐怖^{パニック}について、それが血の一線を踏み越えた人間が襲われる懼るべき「ゲヘナ」の恐怖であり、ドストエフスキイ文学においてこの恐怖とは犯罪者の良心に臨む神の裁き、ゾシマ長老の言う「悪業への懲罰」の表徴に他ならないことを確認した。わずか一週間前にフョードルの脳天を叩き割ったばかりのスメルジャコフの内から、この恐怖感が消え去ってしまうということがあり得ようか。ちなみに先に見た父親殺しに関する彼の回想は、イワンとの三度目で最後の対決の際、しかも彼の死の直前の回想であり、彼は最期の最期まで血の一線を踏み越えたことからくる懼るべき恐怖感に脅かされていたのだ。この殺人者は病院で意識を回復した後、その病床において「正にこの神様」との間で既に何らかの形で対話を交わしていた、あるいは闘いを繰り返していたと考えてまず間違いはないであろう。この角度から父親殺害後のスメルジャコフに、そしてイワンに目を向けないとするならば、先にも記したように我々は、『罪と罰』以降のドストエフスキイ文学の主人公たちが「ゲヘナ」で味あわされた懼るべき恐怖と苦悩の全てを理解せず、彼らが体験した神との出会いのドラマ一切を無にしてしまうことになる。

だが拙速は避けよう。三度にわたる対決を通して描かれる異母兄弟それぞれの罪との対決と、両者それぞれの「活ける神」との出会いのドラマ、心に留めるべきはそのドラマを、

緩急を交えて自在に刻んでゆくドストエフスキイの筆に沿って、我々も慎重に歩を進めることである。

ドーブリエ・リュージ 「親切な人たち」

さてイワンの一度目の訪問においても一つ注目すべきことは、病床のスメルジャコフを訪れて世話をする人々が少なからずいたと記されることだ。彼はまずグレゴリーイの妻マルファが「今まで通りの親切さで、必要なことなら万事につけ私を助けてくれます」と語り、また後に育ての親たちについてこうも語るだろう。「あの人たちは、私が正に生れ落ちてから常に優しくしてくれたのです」（十一 8）。スメルジャコフは自分に注がれ続けた二人の愛情を十分に承知していたのだ(第1章②)。作者は更に病院に「毎日のように訪ねてくれる」という「親切な人たち」についても記す（十一 6）。それらが具体的に誰を指すのかは明らかでない。そこに「婚約者」のマリアとその母が入ることは言うまでもないであろう。第1章において我々はそこにアリョーシャも加えたのだが、「親切な人」としてのアリョーシャについては次の(2)で、また次回第4章や最終回第6章でも繰り返し考えよう。

(2) イワンの二度目のスメルジャコフ訪問

婚約者マリアの許で、アリョーシャの影

最初の訪問から一カ月ほどが経ち、次にイワンが訪れた時のスメルジャコフは、第1章で見たように、マリアとその母によって病院から二人の家に引き取られ、マリアの「婚約者」として手厚く庇護されていた。マリアとスメルジャコフとが、立て続けに起こったゾシマ長老の死とフォードル殺害事件の騒動の只中で、何時如何にして「婚約」にまで至ったのか。また赤貧の極にあった母娘が如何にして「婚約者」を、古いとはいえ新たな住まいに引き取り、その世話まですることが出来たのか。更にスメルジャコフを深い愛情を以って育ててきたマルファとグレゴリーイは、彼が病院を出て育ての親の許には戻らず、マリア母娘の「新居」にその「婚約者」として引き取られてゆくことについて、果たして如何なる反応をしたのか。二人は果たして納得したのか否か。これらの経緯を筆者は一切記さない。読者には容易に理解しかねる、余りにも急激かつ尋常ならざる状況の変化である。

これも第1章で言及したことだが、我々はスメルジャコフがマリア母娘の許で新しい生活を始めたという事実の背後には、アリョーシャの存在があったのではないかと考えたい。そう考えることで、上に挙げた疑問や問いの殆ど全ては氷解するように思われるのである。アリョーシャについては改めて次回の主要テーマとして取り上げるが、ここでも暫らく彼とスメルジャコフとの関係について考えておくことにしよう。

アリョーシャは兄ドミートリイの言葉と、その言葉を発した時の兄の顔を信じ、父フォードルの殺害犯がスメルジャコフであることを一貫して確信し疑わない(十一 6、十二 4、エピローグ 3)。「顔」を信じる。この青年の思考と行動を導くのは、「神とその真理」に対する深い信と愛であり、そこに立つ直観力と洞察力なのだ。このアリョーシャがスメルジ

ヤコフを殺害犯だと確信することと、彼が MARIA 母娘を支え、彼女たちとスメルジャコフとの新しい生活の影の協力者となることとは、何ら矛盾することではない。そしてまたアリョーシャがスメルジャコフを「毎日のように訪ねてくれる」「親切な人たち」の一人であり、彼がこの不幸な異母兄弟のために可能な限り手を尽くそうとすることも何ら不思議なことではない。更にはアリョーシャが、この異母兄弟との間で父親殺しの罪について、更には神について語り合おうと試みたことも大いにあり得ることであり、むしろそうでないと考える方が困難であろう。

改めて思い起こすべきは、MARIA との逢瀬の場でスメルジャコフが自らの出生と運命を呪って発したあの言葉だ。「この世にまるっきり生まれて来ないで済むのだったら、私はまだ胎内にいるうちに自殺してしまいたかったです」。これをアリョーシャは立ち聞きしてしまい、「くしゃみ」と共に登場したことも、第1章で見た通りである。異母兄弟であり下男であるスメルジャコフの心の奥深くに潜む闇、自らの運命に対する怒りと悲しみと呪いをイエスに向かって投げつけるスメルジャコフのことを知ったアリョーシャが、フォードル殺害後の彼を「毎日のように訪ねてくれる」「親切な人々」の一人となったとしても何らおかしくはなく、むしろ極めて自然なことと考えられるのである。

ゾシマの遺訓、「実行的な愛」

「最も罪深い人間をこそ、誰よりも愛するのだ」(一5)。これはアリョーシャの師ゾシマ長老が死に至るまで一貫して強調した、福音書のイエスに土台を置く長老の信仰のエッセンスである(マルコ二17)。アリョーシャが父親殺しの罪人たる異母兄弟スメルジャコフを訪問すること、あるいは彼に心を向け続けることは、この亡き師が彼に言い残した命令、自分の死後お前は直ちに修道院を出て、俗世で「実行的な愛」に励むのだとの「遺訓」の実践としても自然なことであつたらう(一7、二4、七4、十4)。事実アリョーシャは長老の死から三日後、修道院を引き払って町に住まいを見つけ、ドミートリイやイワン、カチェリーナやグルーシェニカ、ホフラコワ夫人やその娘のリーザ(彼女はアリョーシャの婚約者である)、そして次回に見るようにイリュージン少年たちの許を絶えず訪れては、彼らの苦悩に寄り添う生活を開始しているのである(十、十一、エピローグ)。このアリョーシャが、母の胎内での自殺さえ口にし、自らの運命への呪詛をイエスに向かって投げつけるスメルジャコフを、しかも彼自身父親フォードル殺害の犯人と信じて疑わぬこの異母兄弟を、どうして無視したままでいようか。作品の小さな文脈から大きな文脈に至るまで、それらが持つベクトルはまず全て例外なく、アリョーシャとスメルジャコフとの深い結びつきを指し示すものばかりである。

天使の「くしゃみ」

更にここでもう一度、第1章の冒頭で確認した事実を思い出そう。MARIA がスメルジャコフ自殺の知らせを警察への通報よりも何よりも先に、まずはアリョーシャに知らせるべ

く真夜中の町に駆け出したという事実である。なるほどアリョーシャは、緑色のベンチでの二人の逢瀬を突然の「くしゃみ」で中断させてしまい、久しぶりに与えられたマリアの至福の時を台無しにしてしまったのだった。だがこの「くしゃみ」は逢瀬のエピソードに終止符をもたらしたどころか、逆に、正にここから彼とスメルジャコフとマリア三人の間に何かが始まったと考えるべきであろう。さもなければどうしてマリアが、スメルジャコフの死を警察にも誰にも知らせず、真っ先にアリョーシャの許に知らせるべく、真夜中の町に駆け出すことがあろうか。その「何か」について、ドストエフスキイは筆者に最小限の記述しか許さず、我々読者に自ら推測することを促すのだ。ここに『カラマーゾフの兄弟』の捉え難い奥行きの高さと、そこに分け入ることの困難さ、そしてまたそれが持つこの上ない豊かさと魅力があると言うべきであろう。

だがここでも我々は拙速を避け、慎重であるべきだ。「天使のくしゃみ」から「何か」が始まったとしても、果たしてスメルジャコフがこの天使を受け容れたかどうかは明らかではない。むしろ運命への復讐を果たしたスメルジャコフが、血の一線を踏み越えた罪人への神の裁き、「悪業への懲罰」と直面しながらも、天使アリョーシャを頑なに拒み、一人なお「生と神への呪い」を投げつけ続けたと考える方が、可能性が高いとも考えられるのだ。事実、本章の最後で見るアリョーシャの祈りは、そして彼が編纂した「ゾシマ伝」末尾に置かれた自殺者についての考察は、「生と神への呪い」に取り憑かれ続けたスメルジャコフの悪魔的悲劇的生とその末期を踏まえたもののように思われるのである。

ともあれアリョーシャとスメルジャコフとの関係については、なお本論の最大の課題の一つとしてこれからも検討を続けよう。

力に満ちたスメルジャコフ

イワンの二度目の訪問の場に戻ろう。彼が訪れた時、既にスメルジャコフは心身共に健康を回復していた。筆者は、彼の訪問客に対する態度が自信に満ち傲然としたものであり、かつ敵意と憎悪にさえ満ちたものであったと記す。「なぜ、のこのことやってくるのですか？ だってあの時 [一度目の訪問の時]、話は全てついてはいるはずではありませんか」。イワンには、スメルジャコフから自分に向かって、このような無言の言葉が発せられているかのように思われたと記される(十一7)。前回の病院への訪問時、スメルジャコフはイワンが繰り出す今更ながらの問いに、その鋭利な知性とは裏腹に、若旦那が父親殺しの具体的経緯については殆ど何も知らないこと、またその罪についても殆ど自覚してはいないことを見て取ってしまったのだ。スメルジャコフにとってイワンとは、フォードル殺害前に示していたあの臆病さと怯えと躊躇^{ためらい}を、なおそのまま引きずり続ける若旦那だったのである。

イワンを覆う被膜、あるいは原罪性

事件の経緯に関する把握の余りもの少なさ、そして罪の自覚の余りもの遅さと鈍さ。父親殺しに関しイワンが示すこれらの事実には、スメルジャコフならずとも我々読者でさえ

もが少なからず驚かされるものがある。イワンを理解する上で、ここにも一つの大きな壁、あるいは謎が存在すると言えよう。父親殺害から、ようやく裁判前日に至っての完全な罪の自覚まで、この二か月間イワンは何と闘っていたのか、何に妨げられていたのか。

我々はイワンが、父親殺しの後で自らの罪を漠然としか感じずに、半覚半酔の酔っぱらいの如くただただスメルジャコフの許を訪れていたと考えるとしたら、的外れであろう。イワンは自らの罪を知っていたのだ。モスクワにおける思想的な一線の踏み越えの場合とは異なった形で、故郷において教唆犯とはいえ、いざ現実の血の一線の踏み越えを前にした時、イワンの底から新たに懼るべき恐怖感が吹き寄せてこなかったと考えることはまず不可能であろう。だが彼はこの罪意識を、父親が殺された後にも存在の底に達する決定的自覚にまでもたすことがなかったのだ。更に言い換えればイワンは、裁きの神との出会いによる己の根源的罪性の自覚にまでは至れなかった、あるいは至ろうとしなかったのである。つまりイワンは曖昧模糊とした何重もの被膜を通すかのように、漠然とした罪意識に苦しみつつも、その最終的な自覚から逃げていたのだ。事実この後(3)で見るように、スメルジャコフによって自分の罪を決定的に悟らされるにあたり、イワンは自分の目と心を覆っていた「懼れ」と「夢」と「幻」について言及するであろう。イワンにおける「悪業への懲罰」は極めて緩慢に進行したのである。

この問題について、最も確かな証言者となるのはアリョーシャである。我々は本章の最後(6)でイワンの罪の自覚に関して、アリョーシャがその祈りの中で言及するのを見るのだが、そこで彼は兄イワンの底に潜む罪の自覚の遅さについて、それをイワンの「神とその真実」に「未だ従うことを欲しない心」として極めて明晰に捉え、言葉にするであろう。正にここに青年イワンの最大の壁があると言うべきであろう。我々は更にそれが、悪魔の否定の精神に身を委ね、自らを神としたイワンの倨傲の精神の根深さであり、彼の原罪性そのものであると考えたい。イワンに関するこの問題については、本章の最後で(6)アリョーシャの祈りを見る際に、スメルジャコフとの関係で改めて取り上げよう。

一瞬の覚醒

イワンとスメルジャコフの二度目の対決の場に戻ろう。今や厄介者を追い払おうとするかのように、また木で鼻を括るような調子で、スメルジャコフからイワンに宣告が下される——あなたは父親フォードル殺しの願望を持っていたのです。ところが勇気のないあなたは、自ら手を出すことなど出来はしなかったのです。この私をあてにし、全てを任せってしまったのです。

全て見抜かれていたのだ。自分が父親殺しの願望を持ち、その願望の実行を人神理論によって正当化しながら、実際には勇気などなく、この「前衛的肉弾」に全てを放り投げ、彼の後をこのこと随き従って行っただけであり、遂には尻尾を巻いて逃げ出してしまったこと、このことの全てをイワンはスメルジャコフに見抜かれていたのである。人神思想の内実が完膚なきまでに白日の下に曝され、かつての悪魔的高揚感も跡形もなく微塵に吹

き飛ばされ、恥辱感と罪意識の来襲にイワンはパニックに陥る。彼が駆け込んだのはカチェリーナの許であった。だが彼女がイワンに示したのは、父親殺害の意図を記したドミートリイの手紙であった。それは酔っぱらったドミートリイが怒りに任せて書いた手紙でしかなかった。ところがイワンはこれにすっかり安心をさせられ、その後一か月ほど、彼の心からスメルジャコフは消え去ってしまうのである。イワンの内に巣くう原罪性、「神とその真実」に「未だ従うことを欲しない心」の根は深い。

スメルジャコフの激変

さてこの間イワンの許には、スメルジャコフが重い病気に陥り、頭もおかしくなったとの噂が二度ほど流れてくる。彼は発狂に至るであろう、このような見立てを語る医師さえた。だがこれらの情報も、ドミートリイの手紙で安心し切ったイワンの耳をただ右から左へと通り過ぎて行くだけであった(十一7)。

ところでイワンの二度目の訪問の時、スメルジャコフは完全に健康を回復しており、その知力も気力も充実し切っているように見えたことは、先に確認した通りである。だがその後一か月の間に、イワンの存在を完全に葬り去ったスメルジャコフの内部では、彼自身の精神を発狂に追いやり、その肉体を衰弱させ、果ては自らを自殺に追いやるような何か確実に、しかも急速に進行していたのである。

イワンの暗黙の了解と、故郷からの逃走。偽りの癲癇発作。父親殺害の決行。それと共に追い込まれた恐怖の末の真正の癲癇発作。意識不明のままの病院への収容。イワンの病院訪問。マリアとの婚約。マリア宅に移されてからの健康の回復。そして再びイワンの訪問。—— これら激烈な体験をくぐり抜けてきたスメルジャコフは、イワンが束の間与えられた偽りの平安の向こうで、いよいよ完全な発狂さえ予想される危機的な状況に追い込まれていたのだ。血の一線を踏み越えた殺人者に臨む怒りの神の懼るべき裁き、「悪業への懲罰」の現前によって、彼は決定的な危機に差し掛かっていたと考えるべきであろう。

この危機に当たって、アリョーシャが彼を「毎日のように」訪れていたとするならば、彼に対してスメルジャコフは如何なる反応をしたのか。彼はこの天使を受け容れることを完全に拒絶してしまったのか。彼とマリアとの間には、そしてマリアとアリョーシャとの間には如何なる会話が交わされていたのか。—— スメルジャコフを理解する上で不可欠と思われるこの一か月について、ここでも筆者は直接何も語らない。この作品における最も懼ろしい空白であり、謎の一か月である。この問題も我々が最終回まで検討し続けるものであるが、その謎の多くを明らかにしてくれるのは、次に報告されるイワンの三度目にして最後の訪問で交わされる二人の会話である。空白を交え、作者が周到に記すスメルジャコフの心身の激変の内実、運命への復讐を果たした殺人者が直面させられた「悪業への懲罰」について、次に確認しよう。

(3) イワンの三度目のスメルジャコフ訪問

シリアの聖イサク

イワンの三度目の、そして最後のスメルジャコフ訪問(十一8)。マリアによればこの時、スメルジャコフの健康は既に危機的な状態にあり、その精神も「ほとんど正常ではない」ところにきていた。しかし暴れるわけではなく、「この上なく静かにしている」のだという。「あまり長くお話にならないで下さい」。懇願するマリアを背に部屋に入ったイワンがそこで目にしたのは、「すっかり面変わりがし、すっかり痩せ、顔は黄ばんだ」スメルジャコフであった。その「目は落ち窪み、目の下には青い隈があった」。死相が出たとも言うべき鬼気迫る相貌で、この青年は「この上なく静かに」一体何と向き合っていたのか。

次いで筆者は読者に注意を促す。イワンとスメルジャコフの間にあるテーブルの上には、一冊の「黄色い表紙の何か分厚い本」が置かれていた。『シリアの聖イサクの苦行説教集』である。筆者は既にこの本をグレゴリーが所有するものとして紹介している(三1)。六つ指で生まれた自らの子が死に、他ならぬその埋葬の夜スメルジャコフの誕生に接したグレゴリーが、この「自然界の混乱」を前にして心を「神様のこと」に向かわせ、『ヨブ記』や『殉教者列伝』等と共に取り上げたのがこの本である(第1章³)。筆者はグレゴリーが、シリアの聖者の説教集を理解できぬまま何年も根気よく読み続けていたと記す。シリアの聖イサクとはゾシマ長老と同じく、人間が犯す如何なる大罪をも超える神の絶対愛を説いた聖者である。だがその内容の明快さと深遠さと比べると、彼が残した文章は実に複雑かつ難解で長大なものだ。先に見たように私設の「寺子屋」でスメルジャコフに聖書教育を試みはしたものの、直ちにこの生徒から創世記における光の始原の問題で問い詰められると、張り手で応えるしかなかったこの教師には、聖イサクの本はいささか荷が重かったのであろう。(聖イサクについては、拙著『カラマーズフの兄弟論』後篇Ⅶと補遺を参照)。ドストエフスキイはこの本をグレゴリーに代り、新たにスメルジャコフの手に取らせたのである。ドストエフスキイは、運命への復讐を遂げたこの青年を、その直後から「ゲヘナ」に投げ込み、懼るべき「裁きの神」の前に立たせる一方、人間の如何なる罪をも超える神の絶対愛を説く聖者イサクとも向き合わせたのだ。発狂の末に死に至るであろうとまで医師に言わせるほどの、あるいは死相が出るほどの鬼気迫る相貌で、一人「この上なく静かに」スメルジャコフが向き合っていたのは『シリアの聖イサクの苦行説教集』であり、この聖者が説く「愛と赦しの神」だったのである。

スメルジャコフがこの本を如何に読み、如何なるところに至ったのか。この点について筆者は何も語らない。我々も性急な結論を求めることは避けよう。だがこの後更に二人の三度目で最後の対決について見てゆく際に、また最終回の第6章でスメルジャコフの自殺について考える際にも、我々は作者ドストエフスキイが、心身共に既に危機的な状況にあるスメルジャコフをして、「裁きの神」と「愛と赦しの神」という旧約新約の両神と向かい合わせていたという事実を決して忘れてはならないであろう。

「正にこれは神様です」

さて最初の訪問以来、イワンがスメルジャコフにぶつける問いとはただ一点、ひたすら父親殺しの真相、あるいはその具体的な経緯に関してだけであったと言っても過言ではないだろう。そしてこの言動はスメルジャコフによって驚きと軽蔑の対象となり、その心からイワンは殆ど葬り去られてしまったのだった。「なぜ、のこのことやってくるのですか？ だってあの時、話は全てついてはいるはずではありませんか」。二度目の訪問の際に、スメルジャコフがイワンに投げつけた言葉である。今やスメルジャコフにはスメルジャコフに臨む「悪業への懲罰」との対決があり、一方イワンにはイワンへの「悪業への懲罰」が臨んでいたのだ。二人の道は大きく離れてしまったのである。

そして三度目の対決。筆者はイワンに対するスメルジャコフの態度が今や「憎悪」から「軽蔑」へ、と言うよりはむしろ殆ど「嫌悪」に近いものへと変わったと記す(十一8)。スメルジャコフが向き合うのは、最早帰郷時に輝いて見えたあの若旦那イワンではない、この若旦那から彼が与えられるのは今や嫌悪感のみなのだ。「家にお帰り下さい。殺したのはあなたではありません」。こう吐き捨て、スメルジャコフがイワンを追い払おうとした時のことである。「俺でないことは分かっている・・・」。言い淀んだイワンは、答えを最後まで言い切ることが出来なかったとされる。相も変わらず他人事のような話。イワンに対して、「憤怒を込めて」、スメルジャコフから最後の宣告が下される。

「お分かり・ですって？ では申しましょう。その、あなたが、正に殺したのですよ」
(十一9)

イワンこそが主犯であり、自分は共犯者に過ぎない。——「憤怒」と共に発されたこの宣告に、イワンの身体が小刻みに震え始める。イワンが示し始めたこの正真正銘の「恐れ」と「真剣さ」に、なんと今度はスメルジャコフが衝撃を与えられるのである。

「本当に、本当に、今までご存じなかったのですか」

「分かるか？ 俺は懼ろしい、お前は夢ではないのかと。お前は幻で、俺の前にこうして座っているのではないのかと」(同上)

イワンの眼と心を覆っていた被膜、「恐れ」と「夢」と「幻」の一切が消え去り、彼が漠然と直面させられ脅かされ続けてきた「懼るべきもの」が、いよいよ姿を現す時がきたのだ。スメルジャコフが語り出すのは「恐れ」と「夢」と「幻」の被膜の向こうにあったもの、イワンとスメルジャコフ両者に臨む「第三の存在」についてである。

「どんな幻もここにはおりません。私たち二人と、その他にもう一人、第三の存在以外には。疑いなくその存在は今ここにいます。その第三の存在は、私たち二人の間にいるのです」

「誰だ、それは？ 誰がいるのだ？ 誰だ、第三の存在とは？」

「この第三の存在とは、^{ボフ}神です。^{サーマエ・エータ・ブラダイチェーニエ}正にこれは^{オン}神様です。それが今ここに、私たちの傍にいます。ただ、あなたには探しても、見つかりはしません」

「お前が殺したなどということは、嘘だ！お前は気が狂ったのか、そうでなければこの前のように俺をからかっているのだ！」（同上）

『カラマーズフの兄弟』における、最も懼るべき^{エビフアニー}神現前の場面の一つだ。スメルジャコフは「気が狂った」のでも、イワンを「からかっ」いたのでもない。完全な発狂を予想され、死相が出るほどまでに憔悴し切り、無数のゴキブリが這い回る部屋でただ一人、「この上なく静かに」この青年が向かい合っていたのは「神」であり、「神様」であり、「それ」だったのだ。「正にこれは神様です」、この表現はイワンが第一回目に訪問をした時彼が発した「正にこの神様」と活用形が違うのみであり、同じ表現と考えてよいであろう。あの時も、そして今も、二人の「傍ら」に存在していたのは「正にこの神様」だったのである。スメルジャコフは「正にこの神様」の裁きの前に立ち、またシリアの聖イサクの示す「愛と赦しの神」の前にも立ち、その狭間で、死相が出るほどまでに憔悴し切り、「この上なく静かに」自らの罪と対峙していたのだ。このスメルジャコフの目の前にいるのは、未だもって父親殺しの罪を自覚し切れないイワンであった。この若旦那を覆う「懼れ」と「夢」と「幻」の向こうに「疑いなく」存在する「正にこの神様」、スメルジャコフはこの「神」を、「神様」を、そして「それ」を、今や「憤怒」と共に指し示したのである。スメルジャコフの「悪業への懲罰」と神体験については、最終回の第6章で改めて考えたい。

「神が見ておいでだ」

震えるイワンに向かい、スメルジャコフは隠していた三千ルーブリの札束を取り出して見せた後、フォードル殺害の具体的な経緯と、イワンが不審に思っていたことの全てを説明して聞かせる。それは父フォードルの脳天目がけて文鎮を振り下ろし、血の一線を踏み越えた瞬間から、その後彼が如何に懼るべき恐怖に捉えられたかも含めて、生じたこと全てについての詳細な説明であった。この時のスメルジャコフからはイワンに対する「憤怒」は消え、今や彼は若旦那に対して幼な子に説き聴かせるかのように、フォードル殺害に関わる一切を報告したのである。質問をするイワンの声も穏やかなものであり、筆者はこの時の二人は、テーブルを囲んで仲良く話でもしているかのようにであったと記す。かくして事の全てがイワンの内に収められて納得され、彼は完膚なきまでに自らの「罪」を自覚させられたのである。「お前は馬鹿ではない。俺が考えていたより遥かに頭がいい・・・」。

しばらくしてのことだ。イワンは突然大声で叫び始める。

「おい、この不幸な、見下げ果てた奴め！お前には分からないのか。今までまだ俺がお前を殺さずにいるのは、お前を明日の裁判で供述させるために抑えているか

らに他ならない。神が見ておいでだ・・・」(同上)

「神が見ておいでだ」。まずはこの叫びに注目しよう。「神を見る」のではなく、「神が見ておいでだ」。この上なく鋭利なユークリッド的知性の持ち主であり「目撃者」であるイワン、そして悪魔的倨傲の精神の囚われ人であり、「神とその真理」に「未だ従うことを欲しない心」の持ち主イワン、彼ならではの罪の自覚と、神との出会いである。スメルジャコフのそれに続いて、ここにもまた一つ、類い稀な神顕現の形がある。

イワンとスメルジャコフ。これら二人の異母兄弟は、父親殺しに対するそれぞれの「悪業への懲罰」の末に、神の前で再び一つになったのである。だがここには既に新たな悪魔的悲劇も開始されていたのだ。

5. 新たな悲劇、兄弟殺し

「今までまだ俺がお前を殺さずにいるのは、お前を明日の裁判で供述させるために抑えているからに他ならない」。注目すべきことは、「神が見ておいでだ」という決定的な言葉と共に、否、この言葉の前に、イワンがこのような粗暴とも脅迫的とも言うべき言葉を発していることだ。これが父親を殺害したスメルジャコフへの復讐心の迸りなどでないことは言うまでもない。この時イワンは、自分とスメルジャコフとを共に見つめる「裁きの神」の、切迫した懼るべき現前感に曝されていたと考えるべきであろう。

罪の最終的な覚醒に至り、神に見つめられる自分を発見したイワンは、自分自身とスメルジャコフとが直ちに明日の裁判の場での、そして神の裁きの場での自白と告白を確実に果たせとの召喚の声、絶対命法を感じ取ったのだ。ゾシマ長老の前でなされた「教会裁判論」を巡る論議において、彼が国家と教会による二つの裁きを問題としたのは決して議論のための議論ではなかったのである。今やイワンにとり明日の裁判への出頭とは、人間の裁きの場と神の裁きの場との両者において、誤魔化さず確実に自分の罪を自白し、スメルジャコフにも自白させることなのだ。更に敢えて言えば、イワンにとってのスメルジャコフとは神の前に立つ罪人であると共に、フォードル殺害の実行犯として、彼が犯行の際に盗んだ三千ルーブリと共に、法廷に提出されるべき動かし難い「証拠品」なのだ。神の眼に射すくめられたイワンには、眼前の「不幸な見下げた奴」の心の内に分け入り、理解をしようという意図も、また余裕もない。後に悪魔が暴露するように(十一10)、事実この時イワンは、スメルジャコフの自殺を予感しつつも、彼を見捨ててその場を去ってゆくであろう。「神殺し」と「イエス磔殺」と「父親殺し」に続く、新たな「兄弟殺し」の悲劇の出来である。この事情は次の[6]で改めて確認しよう。

かくして翌日法廷で見事に自白をなし遂げるイワンとは、神の眼の前に立つ真摯な罪人イワンであり、かつ先に見たように、法廷に溢れる聴衆もまた自分と同じく父親の死を願

う悪人であり罪人であることを暴露し、しかも彼らを「パンと見世物」を求めるだけの「豚ども」として痛烈に弾劾する厳しい裁きの人イワンでもある。だがこのイワンとは、なお悪魔の囚われ人であり続けるイワンでもあり、下男を神の前に立つ一人の罪人としてではなく、法廷での裁きの場に提出すべき証拠品としてしか見なさぬ若旦那、その死を予感しながらも立ち止まらず見捨ててしまう、結局は「目撃者」であり「兄弟殺し」のイワンなのだ。更に繰り返しとなるのだが、地上に罪なくして涙する幼な子たちを指さしつつ神を弾劾したイワン、このイワンとは目の前にいる異母兄弟のスメルジャコフこそが、理不尽で醜悪な運命の中に放り込まれた「罪なくして涙する幼な子」の一人に他ならないことに気づかず、彼を死に追いやってしまう「兄弟殺し」の罪人イワンでもある。矛盾・分裂体たる「ロシアの小僧っ子」イワンが抱える問題は多く、しかもそれらは不透明であり、彼が歩むべき道はなお余りにも遠く険しい。

本章では最後にアリョーシャの祈りに目を向け、「悪業への懲罰」が臨んだ二人の兄たちを傍らで見守り続けたアリョーシャが、神の前で如何なる思いと判断を表明するかを見ておこう。アリョーシャの祈りとは、彼の二人の兄たちが「悪業への懲罰」の苦しみの末に、神によって如何なる方向に導かれるかについて、作者ドストエフスキイが我々読者に告げる予告であり、かつ預言とも考えるべきものであろう。

6. アリョーシャの祈り

スメルジャコフとの三度目のそして最後の対決。イワンはスメルジャコフの自殺を予感しつつも彼の許を去ってゆく。この予感についてはすぐ後で取り上げよう。帰宅したイワンを待ち受けていたのは、彼の内なる悪魔であった。イワンの人格崩壊は既に悪魔の幻視という段階にまで進行していたのである。最後のスメルジャコフ訪問の直前、カチェリーナもアリョーシャに訴えている。「あの人は気が狂っているのです。ご存知ないのですか、あの人の気が狂ってしまったことを？」(十一5)。

悪魔はイワンに、モスクワにおける彼の思索の足跡を思い起こさせる。つまりイワンは崩れゆくその人格と意識の中で、モスクワでの自らの思索の足跡を振り返り、その「神と不死」探求の旅の全てが悪魔の導きに沿ってなされたものであり、その行き着くところとは悪魔の否定の精神による神の否定と、イエスと「キリストの愛」の排斥であったこと、しかもその否定の試みの全てが故郷の家畜追込町において瓦解したことを自ら認めているのだ。それと同時に彼の内なる悪魔は、あわよくばもう一度自分があの輝かしいモスクワ時代に戻り、あの傲然たる否定の精神とその高揚感とを取り戻すことを夢見てもいるのだ。悪魔が回想するモスクワにおけるイワンの思索の足跡については、既に我々は本章の²で彼の精神史として概観してある。ここで再度扱う必要はないだろう(拙著『カラマーゾフの兄弟

論』V、VII-B,Cを参照)。

さてスメルジャコフ自殺の報をもたらすべく、イワンの住まいに駆けつけたアリョーシャが見出したのは、悪魔との対決によって憔悴し切り錯乱状態にある兄の姿であった。アリョーシャはこの兄に、マリアがスメルジャコフの死について誰にも知らせず真っ先に、走り通しでアリョーシャの許に駆けつけたこと、そして彼女が半ば狂乱状態で全身を木の葉のように震わせていたことを知らせる。更に彼は、折り返しマリアと小屋に駆けつけた時、スメルジャコフはまだ壁からぶら下がったままであったこと、「己自身の意志と好みによって己の命を絶滅させる。誰にも罪を負わせぬため」と記された遺書が残されていたことを伝えるのであった。アリョーシャは、これらの知らせを聞くイワンの相貌の異様さに愕然とする。だが兄から返ってきた言葉は、更に驚くべきものであった。「俺は知っていたんだよ。奴が首を吊ったことは」。「誰から知ったのですか?」。アリョーシャの問いに対して返された答えは「あいつ」、すなわち悪魔であった。

イワンが発する支離滅裂な言葉に根気よく耳を傾け、アリョーシャがようやくこの兄を鎮めすかし寝かしつけた後のことである。筆者はアリョーシャが奉げる神への祈りと、それに続く思索・瞑想について報告をする。筆者がアリョーシャの祈りと、それに続く思いを読者に報告するのは、「場違いな会合」の日の夜に続いて二度目のことだ。このことで主人公アリョーシャの神との対話が読者に開示され、また彼の内で進行する複雑な心的葛藤を知る手掛かりも与えられるという点で、これらはドストエフスキイ文学の中でも稀有な場面として注目すべきものである。

さて神の前にアリョーシャが祈り、思いを巡らせるのは兄イワンの「病気」について、またもう一人の兄スメルジャコフの「自死」について、そしてこれら二人の兄の運命を司る神の経緯についてである。

「彼[アリョーシャ]にはイワンの病気のことが分かって来た。《誇り高い決心の苦しみだ。深い良心なのだ!彼の信じなかった神とその真実が、未だ従うことを欲しない心を征服しようとしていたのだ》。《そう》、既に枕に横たえたアリョーシャの頭の中を、このような考えが掠めた。《そうだ、スメルジャコフが死んでしまった以上、兄の供述を誰も信じはしないだろう。だが兄は出かけて行き、供述をするだろう!》。アリョーシャは静かに微笑んだ。《神様が勝つのだ!》。こう彼は考えた。《真実の光の中に立ち上がるか、あるいは・・・信じていないものに仕えたがために、自分と全ての人間に恨みを晴らしつつ、憎悪で身を滅ぼすかだ》。アリョーシャはこう悲痛な気持ちで付け加えると、再びイワンのために祈るのであった」

(十一10)

この短い祈りと思索・瞑想の内に示されたことは実に多い。我々は以下の二点に注意しておこう。まず「彼の信じなかった神とその真実が、未だ従うことを欲しない心を征服し

ようとしていたのだ」。アリョーシャは目の前に横たわる「イワンの病気」が、いよいよその最終段階に来つつあることを確信したのだ。その「病気」とは、ただ単に彼の心身の乱調を指して言われたのではない。アリョーシャは兄イワンの神否定と、イエスと「キリストの愛」の排斥と、それに続くスメルジャコフとの父親殺しにまで及んだ「罪」のことを既に十二分に知り、兄の内なる悪魔の抵抗のことも承知していたのだ。しかしいよいよ兄がその罪の最終的な自覚に至りつつあること、そしてその罪を正面から受け容れようとの「誇り高い決心」に至りつつあることを知ったのである。「神様が勝つのだ！」。罪人イワンの良心を通して臨む神の怒りと裁き、「悪業への懲罰」が終わりに近づきつつあること、「キリストの律法」がイワンにおいて成就しようとしていることをアリョーシャは確信したのである。「実行的な愛」の人アリョーシャの心が日頃何処に向かい、また如何に動いていたかがここに明らかとなる。

次にアリョーシャの心が向かうのは、やがて「真実の光の中に起ち上がる」であろうイワンに対して、「信じていないものに仕えたがために、自分と全ての人間に恨みを晴らしつつ、憎悪で身を滅ぼす」に至ったもう一人の兄スメルジャコフである。壁にぶら下がったスメルジャコフを目の当たりにし、その遺書に接したアリョーシャはこの時この兄が、イワンとは逆に悪魔の手に渡り、「身を滅ぼした」と考えたのだ。アリョーシャにとり、スメルジャコフが叩きつけた運命と神への「恨み」と「憎悪」、「神と生命への呪い」(六三D)は、それほどまでに激しいものであり、その末に彼が選び取った死は、それだけ一層恐ろしく痛ましい衝撃だったに違いない。

アリョーシャとイワン、そしてアリョーシャとスメルジャコフ、これら三人の異母兄弟たちが父親のフョードルが殺害された後、それぞれ如何なる形で交流を続けていたのかについて、筆者は具体的には記さない。だがアリョーシャの祈りが我々に示すのは、この末弟が二人の兄の「病気」について、如何に的確にかつ深く把握していたかということである。二人の兄の傍らに寄り添い続ける「親切な人」アリョーシャがここにいる。

「十字架への道」と「絞首台への道」

最後に確認すべきは、アリョーシャの祈りに先立つ錯乱状態の中で、イワンが発した二つの言葉である。その支離滅裂な饒舌の中でイワンは、スメルジャコフが「絞首台」への道を選んだのに対し、自分は「十字架」への道を選んだと口にするのだ。

「明日は十字架で、絞首台ではない。否、俺は首を吊ったりはしない！お前は知っているな。俺は決して自殺など出来ないことを、アリョーシャ！卑劣さからだろうか？俺は臆病ではない。生への渴望からなのだ！何故俺はスメルジャコフが首を吊ったということを知っていたのだろうか？ そうだ、これはあいつ[悪魔]が言ったのだった・・・」(十一10)

「十字架」と「絞首台」。人格崩壊の崖を転げ落ちながらイワンは、自分たち二人の父親殺しの異母兄弟が歩む道を的確に把握していたのだ。イワンはスメルジャコフが「絞首台」への道を取ったのに対して、自分が「十字架」への道を取るのは「卑劣さ」からでも「臆病」であるからでもなく、内なる「生への渴望」からだとする。自らの内なる「生への渴望」を正面から生きること、それは「卑劣さ」などではなく、自らの十字架を負って生きること他にないことをイワンは、解体しつつある意識の中で既に捉えていたのである。ドミートリイの予言は的確なものであったと言うべきであろう。

このイワンを受けてアリョーシャは「十字架」を選んだイワンが、この先歩むべき道は気が遠くなるほど長く険しいとはいえ、先に見たように、兄がやがていつの日か「神とその真実」に摂取され、「真実の光の中に立ち上がる」ことを祈ったと考えるべきであろう。

だがアリョーシャはイワンのみをよしとして、スメルジャコフを斥けたわけではない。彼は「絞首台」への道を選び取ってしまったスメルジャコフとも、兄に代わって正面から向き合うであろう。つまり彼は「信じていないものに仕えたがために、自分と全ての人間に恨みを晴らしつつ、憎悪で身を滅ぼした」もう一人の兄の死と生の意味についてなお考察を続け、自らが編纂する「ゾシマ伝」において兄への鎮魂歌、その痛ましい悲劇的生と死への魂の底からの葬送の辞を捧げるであろう。この葬送の辞については、第6章で詳しく検討することにしよう。その前に我々は次の第4章と第5章で、アリョーシャとドミートリイの在り方についても、彼らのスメルジャコフとの関係を中心として、改めて考察しておかなければならない。

(第3章・了)